
B&B 第四章

因幡素兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B & a m p ; B 第四章

【Nコード】

N 6 2 4 3 I

【作者名】

因幡素兎

【あらすじ】

姉妹の通う、至成学院で子供達が大暴れ。さあ、姉妹はどうか。

また夢を見てるみたいだ。

この夢の特徴は”夢だな”とすぐわかるところにある気がする。最近ではそんなことを考えていられるほど、余裕である。自分でもこの夢に慣れてきているのが分かる。

白い洋館が横たわる。正面に見えるテラスには誰もいない。しかしすぐにシーンは変わった。

四角い部屋。何もないすっきりした空間。テラスに続く窓辺になびくレースのカーテンから白い明かりが突き抜けてきて、フロアリングの床に所々光沢を放たせている。

テラスに向かう噴き出し窓より視線を左にスライドすると部屋の隅に大きな黒光りするグランドピアノが見える。そこで少女はいつものようにあの曲を弾いていた。

”タラリラット、タラリラ、タラリ、ラリラ、タラリラ”

こんなにちは蛇悪ちゃん。

少女は演奏を止める。おもむろに腰を上げると、白く美しい顔を露わにする。そして俺を見てにたりと不気味に微笑むのだ。

「マコトくんは、踊れるかしら？」

「どうだろう？ 踊れるのかな。」

「わたし、踊るね。」

よく分からない会話だが、まったく無関係の場所から聞いている俺にとっては、ただの舞台上の台詞だ。

彼女はフロアリングの部屋を踊り回った。バレエだろうか？ なん

だか軽々と体を回転させたり飛んだり跳ねたり、楽しそうだ。

踊りながら俺を時々見て、また不気味に微笑む。

青いドレスがたなびく。平面としたフローリングで彼女は不気味な舞踏を踏んだ。それはあの曲に似ていた。むしろ踊りを見てるだけで、あの曲を聴いているようだった。

さしずめ、彼女は踊るピエロ。俺はそれを眺める少年。

見飽きた光景。白い洋館の中、不思議な音色、不思議な踊り。壊れかけの小さな笑顔。閉ざされた記憶。見えない過去。夢の中だけなら思い出せる恐怖。目覚めてしまう・・・目覚めてしまう。忘れてしまう。重要な真実。

バーイ、さようなら、蛇悪ちゃん。

目を覚ますとまたいつものクロトの部屋のソファの上。寝起きの気だるい視線の先にクロトの座る横顔が映った。

なにやら携帯電話を眺めて、うつむき口を閉じて深いため息をつく。悩ましげで憂鬱そうな横顔がとても美しいものに見えて俺は少し魅入っていた。

「マコト、おきたの・・・」

するとクロトはこっちに気づいた。作り笑いを浮かべて表情を隠す。

「どうかしたのか？」

こう、聞いてみても

「うん、なにが？」

と言って、クロトはケータイを閉じるだけだった。

このところクロトはいつもこんな感じだ。携帯電話を見てため息を吐く癖がある。いつものメモだろうか？妹と何かあったのかな？と訊くと「そうじゃないけど、何でもないんだ」と答えられる。

そういえばまた例のゴミ箱死体遺棄事件が起きたらしい。これだ計、十件目、今月だけでもう3件目である。春の時や初夏の頃に比

べて明らかなペースアップを見せている。でもそのせいでクロトの表情がすぐれないのとは考えにくい。最近では逆にもうこの事件のことには、さすがに慣れてきている感があるくらいだからだ。

「僕、今日は早く寝るよ。」

「なんで？」

「学校でちょっとした問題が起こってるらしいんだ。明日は帰りが遅くなるかも知れない。」

ははあ、なるほど珍しくそっちの心配だったか・・・。

なんでも学校で一人の教師が、生徒と殴り合いの暴行事件を起こしたらしい。

しかしこの情報は外部には流出していない。学校の中で理事長や校長の下PTAにも知らされることなく、もみ消しにされたのだそう。しかし、クロトが言うには一部のPTAの親御さん達には知らされているという。それでも親たちが騒がないのは、学校に対してそれほど信頼を置いているからだ。あの学校は成績を上げて良い高校や大学に進学させるための進学校だから、生徒達の親も妙な事件で自分の子供達の将来に響くようなことは避けたいのだと言う。教師と殴り合いになった生徒は、自宅謹慎になったというが、クロトは殴り合いをしたとうの教師の方が、何の罰則も受けていないのが、不満なようだった。

「このままでは生徒の方があまりにもかわいそうだ」とクロトはそう言っていた。クロトらしい正直でまっすぐな意見だ。

「じゃあ、俺もそろそろ帰るわ。」

言って立ち上がった俺は、上着を着る。

「うん。またね。」

クロトに玄関まで見送ってもらうと、俺はマンションを出た。

空高い、秋晴れの陽気の日のことだった。至成学院中等部とそう

題された褐色の外壁。その向こうにある学習施設群。その中の一棟の校舎でその事件は始まっていた。

放課後だろう。校庭には部活動の生徒達さえもなく。ガランと静まりかえっていた。三年生は夏から受験シーズンに入り、低学年でもこの時期は中間試験に向けて部活動は休止。大仰な施設群は一見もぬけの殻のように静謐にたたずんでいた。

中央の本校舎、三階建ての東側の校舎、本校舎と反対側の特別校舎S館その隣の体育館とプール。いくつもの学習施設の中で明らかに異なる面持ちをしているものがあった。それが本校舎の左隣、西校舎通称”赤館”と呼ばれる派手な赤い塗装を施された三階建ての校舎だった。

その赤館という校舎が他と比べ特異な雰囲気をしているのはただその外装が赤塗りであるからだけではなかった。それだけならば形事態は隣の本校舎や正面の東校舎となんら遜色がないため、よもすれば屋根の部分が丸いドーム状になっていてメタリックな外装パネルが張られている南側のS館の方がよっぽど目立つ外観をしている。特異といえるだろう。しかし、赤館はただ外見だけじゃなく、中身も噂に名高い存在だった。

ただでさえ、至成学院という学校は進学校で有名で、英才教育の発信源と言っても過言でない歴史まで持っている。その至成学院の中であっても特異と言えるほどの超進学レベルの教育を行っている。それが赤館の正体である。

一年生、二年生、三年生、三つに分かれる学年。この一つ一つにA～Dまでの四つのクラス分けがなされ、成績が悪いものがAクラス、良いものにつれてB、Cとクラスアップするシステムになっている。その中でも最たる実力者がDクラスと言うことになるのは必然である。して、赤館とはそのDクラスだけが三学年分集まっている、超特別進学級の校舎ということであると同時に一種の他クラスとの分離を強いられた隔離校舎ともいえた。

Dクラス、つまり赤館である。その赤館に入るすべての生徒が超

エリート特進コースという看板を背負うに相応しい能力の持ち主達である。全国模試では常にトップクラスを排出する、その実力の陰には血のにじむような生徒達の日頃の勉強尽くしの毎日があるのは言うまでもない。赤館に、まがまがしいとでも言おうか、その何か受験生のオーラのようなものを感じさせるような異様な雰囲気がいちあふれているのは、そのためであると言えるだろう。

そしてこの日。一見、誰の気配も感じさせない、その校舎。そこで事件は今まさに始まっていた。

最初はそう、職員室に一本の電話が鳴り響いたときだった。

電話に出た教師はD組の担任で数学科を受け持つ浅原福津だった。右目の下に大きなガーゼを張っている。電話の相手はD組の生徒、香苗純の母親だった。

「うちの子が塾にも行かないで、家にも帰っていないんですっつ
！」

女性特有のヒステリーな叫びのような口調で香苗純の母親は訴えた。

「はあ、学校はもう終わって、下校しているはずですが？」

浅原福津は困った風に答えた。

「とにかく帰っていないんですよ！どうすればいいんですかっつ
！」

「まあ落ち着いてください。」

どんだん声を荒げている香苗純の母親をなだめながら浅原福津はしばし焦った。すると電話のコールがほかのところでも鳴った。それに出た一年B組の担任の木村青子は「はい、はい、」といくらか応答してから

「浅原先生。」

と浅原福津を指して呼んだ。

「なんですか？」

「ちょっと待っててください」と香苗純の母親に告げて少々不機嫌気味に浅原福津は木村青子に答えた。

青子は眉をひそめて

「D組の杉浦浩二君のお母様からです。」
と伝えた。

浅原福津は「んなっ・・・？」と貌をしかめた。

香苗純の母親を待たせると、浅原福津は回線を変えて杉浦浩二の母親に応答した。

「ええ、ええ、はい、ちゃんと探しましたか？」

いくつかの応答を聞いていた教頭の小山が浅原の方へ歩み寄る。

「どうかしたのかね？」

浅原は電話を離して教頭の方を見ると少し青ざめた貌で答えた。

「私のクラスの香苗純と杉浦浩二の二人がまだ家にも通い付けの塾にも戻っていないそうなんです。」

その言葉を期に一斉に職員室の電話が鳴り響いた。そこら中で電話が鳴る中、場にいた教師達が次々に取り次いだ、しかしそのどれもが予期せぬことにD組の生徒の親たちで、「うちの子が帰っていない。」という内容だった。

職員室は騒然とした。怪訝そうな色が立ちこめる。

「いったいどうなっているんだね？」

教頭の小山が浅原に言った。

「わかりません。一人や二人なら何かの事件にとも考えられますが・・・いったい何で全員が全員。」

「まるで何か、示し合わせてるみたいですね。」

国語科の阿部がつぶやくように言った。

「校長を呼びましょうか。」

木村青子がそう言うのと教頭は眉間にしわを寄せた。

「待ちたまえ、君、何も校長を呼ぶこともなかろう。」

「ですが・・・。」

「今はどういふことなのか、ことの把握を急ぐべきだよ。」

そう言って、ぐずぐずと右へ行ったり左へ行ったりと足を止めない。

「とりあえず、親御さん達にはもう少し、こちらの連絡を待っていていただくしかないか。」

浅原がそう言った。

そしてそのとき、誰かが、大声を上げた。

「ちよつと、みなさんこれを見てください！」

言ったのは一学年の学年主任の滝原治だった。

みなが彼のデスクに駆け寄ると、彼の使うPCの画面には、この至成学園の裏サイトが立ち上がっていた。彼はこの裏サイトの取り締まりを行っているのだった。しかし、そのサイトにはデカデカとある奇妙な一文が受信されていた。

「・・・これは宣戦布告である。」

木村青子が意味不明そうに読み上げた。

画面には黒塗りの背景の真ん中に赤い太字で青子の口にした一文が映っている。どうやら文字はクリックすればリンクに繋がっているようだった。

一同は息をのんで、滝原のクリックを見守った。

リンクを開くと、一つの動画が受信された。

動画には、一人の少年が映っていた。背景には黒板。彼は教卓の後ろに立っている。どこかの教室だろうか・・・。

「中村赤耶だ！あいつなんで学校に登校してるんだっ！」

浅原が目の下のカバーをさわりながら叫んだ。

動画の少年は中村赤耶というD組の生徒だった。左頬にまだ色の褪せていない紫色の痣がくっきりと浮かんでいる。制服は着ていない。赤いパーカーを着て下半身は教卓に隠れて見えない。

「だめです。今日登校していない、空木黒葉と中村赤耶、市原紅太をのぞく、電話の来ていない残りの生徒全員の家に連絡を取りましたが・・・一人も帰ってません。」

それまで各生徒の家に連絡を入れていたD組の副担任の、生島が言ってやってきた。

「そうですか・・・」

青子一人が答える。

「みんなどうしたんですか？」

生島は息の詰まるような重々しい教師達の視線が向けられるPCの画面をのぞき込んだ。

画面にはいつのまにか教卓の後ろに立つ中村赤耶の両隣に他のクラスメイト達が集まっていた。帰宅していないというその生徒達である。まるで中村赤耶を守って支えるように両脇に並んで立っている。そのどれもが示し合わせたように赤いトップスと黒のボトムスを着ていた。まるでカラーギャングの様である。

「これはいったいどうなってるんだ？」

ついに教頭が当惑気味に声を漏らした。

「ここは・・・D組だ・・・」

浅原は啞然とした口ぶりだ。

中村赤耶が何かしゃべろうとしている。みんなはPCの画面にまします視線を釘付けにされた。

「えー、聞こえてるだろうか・・・？」

そして中村赤耶がしゃべり始めた。その表情は硬く、しかし決しておおらかさを失ってはいない。むしろ余裕さえ感じられるような底知れぬ度胸のようなものが感じられた。しかしそれは今回限りのことではない、中村赤耶は元からそう言う得体の知れない自信のよくなものをまとった生徒だった。成績も優秀、運動神経も抜群、クラスのリーダー的な存在、ついこの間までは学級委員だった。模範生というものを絵に描いたような存在。それも、ついこの間までの話ではあるが・・・。

「ちゃんと映ってるかな、ジュン？」

「うん、大丈夫だよ。」

中村赤耶は画像を映しているカメラの後ろ側と思われる位置に、声をかける。そしてジュンと呼ばれた少年の返事が返ってきた。

「じゃあ、始めようか。」

そう言うと中村赤耶は画面をまっすぐと見つめた。

教師達はたじろぐ。彼のその冴え渡る剣のような鋭敏な眼差しが何かすべてのまやかしを見破っているようで怖かったのかもしれない。彼の目にはそういった強烈な効果があるのだ。

「諸先生方はお集まりになられたでしょうか？」

芝居じみた口調と台詞で彼は始めた。

「OK。始めよう。」

えーっと、まず最初に、ここにクラスの過半数を優に超える同士達が集まってくれたことを感謝する。みんな、ありがとう。」

中村赤耶は深々と左右に礼をする。周囲のもの達は頼もしそうに笑みを称えてそれを受けた。そして再び中村赤耶は視線をカメラに戻した。

「そして、教師および、PTAの皆様方に告ぐ。

これは、革命です。」

PCを見つめるすべての教師が耳を疑った。そんな時代錯誤な言葉がよもやこの日本で口にされるなど、しかも彼らはまだ中学生なのだ……。いったい、何を言っているのだろうと皆は中継の画面を見守った。

「僕たちは今、赤館三階のD組のクラスを占拠しました。これより立てこもりを実行します。」

僕たちはもう、あなた達の敵です。あなた達がかねてより僕たちの暗なる敵であったように……。

僕たちは戦います。あなた達がしてきたすべての間違いを正すため。僕たちは本気です。もう誰も止めることはできない。」

「いったい……何を言ってるんだこの子は？」

教頭が沸つと呟いた。中村赤耶は続ける。とても穏やかな口調で、大人を見透かしたような目線で……。

「人質は僕たち自身の命です。賭けるものは僕たち自身の魂です。証明は僕たち自身の心です。今からその証拠を見せましょう。」

と、そこまで言うとは彼は突然、右手を挙げて袖をおろした。そ

して次に左手で短い刃のナイフを一本取り出した。周囲の仲間達もざわめく。

刹那、

彼は微笑む。左手のナイフが右手の手首に触れる。そして、赤い血が教卓に舞った。

「きゃああああ、」

女教師が一人それを、見て叫んだ。

彼は自らの手首を切り裂いたのだ。血が流れ出し止まらない。クラスメートの仲間達が叫びのような声を上げる。そして未だ立ったままカメラを見つめる中村赤耶を支える。

「おい、赤耶！どうして？」

「ウソでしょうっっ！」

どうやら今の一種のパフォーマンスは仲間には内緒だったようだ。画面の中は混乱に満ちた。

そんな中、木村青子は動いた。

「いかなきゃっっ！」

言うや否や、彼女は職員室を飛び出していった。数人の教師が振り返ってその青子の後ろ姿をぽつんと見送った。

そして、画面の中、中村赤耶は最後に荒い動悸を弾ませながら、

「こ、これでお分かりだろう。・・・もう一度言う、人質は・・・僕たち自身だ。」

これで犯行声明を終わります。」

そう言って、動画はぷつんと途絶えた。

その後、数十件もの電話が職員室に鳴り響き、そのどれもがまた、その動画を見させられたという情報だった。どうやら生徒達は示し合わせて家に連絡を入れて、サイトを開いて動画を見るように促したようだった。

「いったいどういうことだ？責任はとれるのか？」

そう生徒の親に責任を問われた教頭の小山はなんと返したらいいのか分からず、ただ受話器を手に、立ち尽くすしかなかった。

夕刻も過ぎ去ってしばらくした暗い夜。

コンコンコン、ノックを数回。赤館の裏手、トイレの窓に面する場所に少女はいた。漆黒の長い髪を垂らした、中学校一年生くらいの少女だ。

「合言葉は？」

少女が窓に向かってノックすると、中からそう言葉が返ってきた。

「血塗りの赤色」

少女が答えると、窓はゆっくりと開けられた。

「入れ。」

誰かが言って、少女は素早く中に入った。

「コクハ、本当に来てくれたのか・・・。」

少女が中に入ると一人の少年が窓の鍵を閉めてから言った。上背の細長い少年だ。

「・・・放っておけないだろう。」

コクハと呼ばれた少女は答えた。

「よかった・・・。正直、おまえがいると心強いよ。」

少年は少しうれしそうに微笑んだ。

少女は少年のはにかんだ笑いに目もくれず、トイレの出口へ向かった。

「杉浦、状況はどうなってる？」

トイレの中は少し寒い、肩をさすりながら少女は言った。杉浦という少年は嫌な貌をするでもなくそんな素っ気ない少女の後について行きながら答えた。

「裏サイトから犯行声明は出したよ。」

「そうか・・・」

トイレを出ると、その隣りすぐに山のように積み上げられた机や、椅子やロッカーの棚があった。規則正しく四角く高い形に積み上げ

られ、ロープで縛られてその形を固定されている。

「コクハっ。おまえ来てくれたのか。」

トイレを出ると数人の少年少女がコクハと呼ばれる少女に駆け寄ってきた。

「・・・ああ。」

少女はそれらを横目で一瞥すると無愛想に答えた。

少年少女達は四人がドアから出た後すぐに、積み上げられてロープで固定された手作りの壁を動かしてトイレの入り口を塞いだ。

「バリケードか・・・。」

それを見て少女が呟いた。杉浦という少年が答える。

「ああ、こんな感じで少し頼りないけど、同じように校舎の入り口と避難口とか出入りできるような場所は塞いであるんだ。」

「そうか・・・。」

「さあ、こっちだ。」

杉浦に誘導されて少女はそのまま階段を上って三階にある一年D組の教室へと向かった。

校舎の中は真っ暗で明かりもついていなかった。時々階段の踊り場にある高い窓から月の光が青白く差し込んでいた。D組に向かう途中にもいくつかバリケードが用意されており、いつでも道を塞げるように壁に向かって建てられていた。

教室に着くと、数十人の生徒達が少女を出迎えた。それぞれが沸き立つように少女の出現に歓喜した。

少女は笑わない。出迎えをまるで拒絶するように無表情に生徒達を眺めた。

全員、赤い服と黒いズボンをはいている。全部で三十人近くいるだろうか・・・。

「これで全員か・・・。」

「いや、見張りやら何やらでここにいるのは待機の連中だけだよ。」

杉浦が答える。

「・・・アカヤは？」

少女は呟いた。すると歓喜に満ちた全員の表情が変わった。

「アカヤは・・・」

杉浦が静かに答えた。

「あいつは俺たちとは覚悟が違う。それを思い知らされたよ。」

そう言うと杉浦は少女を再び一階へと案内した。次に少女が連れて行かれたのは一階の三年生の教室だった。

中へ入るとそこには少女のよく知った貌が居た。

「コクハっつ！」

突然の救世主の出現に喜びと驚きを隠せないようなそんな笑顔と声をして、二人は少女を出迎えた。

入谷繚と灰原浅葱だった。

二人は入り口に駆け寄り、少女に抱きつかんとばかりに迫った。

「おまえら・・・。」

少女は二人を見て、そして続いて部屋の向こうを見やって驚きの呟きをこぼした。

「あお・・・こ・・・？」

教室の窓際には他にも数人の生徒が固まっていた。そしてその中に一人の大人を発見したのだ。

「青子先生には、アカヤ君の治療のために特別に中に入れてもらったの。」

イリヤが弱い口調でそう言った。

少女がゆっくりとそれに歩み寄ると、アオコは中村赤耶の手首に白い包帯を巻いていた。

「これは・・・？」

「うん、アカヤ君は決心を見せるために自分の手首を切ったの。」
イリヤが馬鹿みたいと吐き捨てるように言った。

「まだ、怒ってんのか？」

中村赤耶はそんなイリヤを横見に見た。イリヤは口を噤んで答えない。

「おまえは想ってたよりも数段上の馬鹿野郎だな。」

少女が冷ややかな目でアカヤの包帯を見ながら言うとかアカヤは微笑を浮かべて

「君にそう言われたら言い返す言葉が僕には無いな。」と答えた。

「当然だ。」

少女が少々立腹気味に言うのと、それを見てアオコはクスツと笑った。すると横にいた二人の生徒も笑みを浮かべた。少女の後ろのアサギも杉浦も可笑しそうにクスクスと笑った。イリヤだけは憤然と口を噤んでいた。

「はい出来上がり。」

アオコがそう言って、少年の腕を下ろした。

「ありがとうございます。青子先生。」

中村赤耶は丁寧な礼を言った。アオコはにこりと笑って

「どういたしまして。」と答えた。

「じゃあ、ぼ、私は戻るわね。」

そう言って、アオコは立ち上がる。

「アオコちゃ・・・先生。」

少女は呼び止めた。アオコは振り返る。

「ん？」

「なにも言わないのか？その止めるとか・・・。」

「私が止めたら、あなた達はこんなことをやめてくれるのかしら？」

「やめないね。」

アカヤが答えた。

「でしょうね。」

アオコは苦笑して、一人の生徒に案内されて教室を去っていった。

「さあ、これからが本番だ。とりあえず、コクハ、ようこそ僕たちの学校へ。」

アカヤはそう言って、アオコが去った後、少女に出迎えの言葉を

告げた。少女は少々呆れた目つきでアカヤを見て、何も言葉を返さなかった。

「中村さんっつ！」

香苗純の母が叫んだ。中村赤耶の母親が突然その場に倒れ込んでしまったのだ。しかし、それも無理もない、今し方自分の息子がP Cの画面の中で予想だにしない行動をとったのだから。それは犯行声明についてなのか、それとも手首をナイフで切り裂いたことなのかは、分からない。いや、その両方に中村赤耶の母親は強いショックを受けて倒れた。

杉浦浩二の母。灰原浅葱の父。など、その他十数名以上の保護者がその場に集まっていた。それぞれの子供から携帯電話で学校の裏サイトを見るように促され、親たちは連絡を取り合ってこうして香苗純の家に集合していたのだ。

そしてあの映像を見た。親たちが今どんな心境なのかは、言うまでもない。

香苗純の母親は中村赤耶の母を支えて立たせた。目眩がすると頭を押さえている中村赤耶の母の脳裏には、未だに鮮明に息子の信じられない映像が残っていた。

きつと、誰かにやらされているんだわ。言わされていたんだわ。だってそうでしょ？あの子があのような子をするはずがないもの……。

他の親も同様、その思いは強かった。

「うちの子が、うちの子に限って、そんな野蛮なことするはずがないわ……。」

杉浦浩二の母親が”ウソよ、ウソよ”と首を横に振って決定づけるように頷いた。

「案外、みんなで示し合わせて大人を騙してるのかも……。」

誰かがそう言ったが、それは樂觀的すぎると冷たい雰囲気は排他された。さっきの中村赤耶の異常な行為を見て、大人をからかってる程度と認識するのは無理があるのだ。

「リーダーは中村さんの息子さんでしょ？ 赤耶君がクラスみんなをそそのかしたんじゃないの？」

そんなことを言う人もいた。

「そんなひどい・・・赤耶がそんなこと・・・。」

「ちよっとそんな根も葉もないこと言わないでください。」

中村赤耶の母が怯むと、香苗純の母はかばった。

「別に根も葉もなくはないでしょう。赤耶君は子供達にすごい影響力がある子だし、あの子ならみんな考えなしについて行っちゃうんじゃないかしら？ それに赤耶君は少なからず学校に恨みがあるでしょう？」

場の雰囲気はなんだかぎこちない感じになってきた。そんな中、

灰原浅葱の父が言った。

「まあまあ、こんな時に争っても仕方ない。皆さんの言うことももっともですが、仮に赤耶君がクラスを先導しているとしても、先導はする側にはもちろんされる側にも大きな責任があるものだ。だから、犯人捜しはやめよう。」

それよりも今は、これが本当に子供達の意志によっての行動なのかを確かめる必要の方が先ですよ。」

うまくまとめられた、と腑に落ちない貌の親も居たが、誰かが言った。

「そうですね。まだあの子達が自分からって訳じゃないもの。きっと誰かに脅かされて仕方なくやってるのよ。」

「そうよね。きっとそうだね。」

場の雰囲気は沸き立った。でもそれはどこかそう信じようとその可能性にすがろうとするような、なんとも表面的な安心感を与えるものでしかなかった。

中村赤耶の母の、香苗純の母の、杉浦浩二の母の、その心には今

も、何かとてつもない胸騒ぎが止めどなく脈打っていたのだから。
「そうとなったら、まずは学校に行きましょう。事の経緯を聞いて、しかるべき場合警察となるでしょう。」

灰原浅葱の父がまとめ、そして一行は至成学院へと向かった。

その頃、至成学院本校舎。

「どうするんです、教頭？」

D組担任の浅原は脂汗を額に滲ませながら、教頭の小山に言った。
「どうするってね、きみ。元はといえばきみの監督不行届だろう。」

小山は辛らつに言葉を返した。浅原はうなだれた様子で頭を掻いた。

教師達は事態に蒼白である。

そのとき、校長の榎田が事態を聞きつけ足早にやって来た。

「いったいどうなってるんだね？」

「それが校長。私共も何がやらないやら……。」

小山教頭は焦って対応する。

「青子先生が戻ってきました。」

誰かが言った。

青子は静かな足取りで職員室に戻ってきた。

「おお青子先生、説得はできたのかね？」

小山教頭が助けを迎えるように青子に歩み寄った。青子は”は？”と小首をかしげる。

「説得……ですか？ 私は赤耶君の手首の治療をしただけです。」

「な……。」

小山教頭は愕然とした顔をした。

「青子先生、きみは何を言ってるんだ。せっかく生徒達と接触をしたというのに、何もしないで帰ってきたというのかね？」

「あ……はい。すみません。」

小山教頭に責めを受けると青子は腑に落ちない感じで謝罪した。

「そんなことより。D組の担任は確か、浅原君だったね。」

校長がそう言うのと、浅原は蒼白の顔色でピクツと肩をすばませた。

「は、はい。」

「きみはこの前も生徒と問題を起こしたばかりじゃないか？ いったいどう責任をとるつもりなんだね？」

「はあ、私も何がなにやら、なのです。」

「言い訳は聞きたくないな。この件がもしも最悪の事態に陥った場合は。きみにはしかるべき責任をとってもらうことになるよ。」

「はい、申し訳ございません。」

浅原はしきりに謝り続けていた。それでも榎田校長はそれ以上何も言葉を与えなかった。

「どうするんだね。もうすぐ理事長もこっちに帰ってくるが。早々に解決しなければ・・・。」

校長も当惑気味だ。職員室はまず上の方から指揮系統が乱れていた。こんな異例の事態に職員達はなすすべも考えられなかった。

「あの、校門に生徒達の親が・・・」

学年主任の滝原が言った。校長も教頭も職員達もピクリと反応して、どうするべきか頭の中がますます混乱した。

「いったい、これはどういう事ですか？」

杉浦浩二の母親は職員室にあがると同時に小山教頭に向かっていった。
「はあ、それが私共もいったい何が原因なのか分からないのです。」

「

杉浦浩二の母の後から次々と生徒達の親が職員室に上がり込む。

その雰囲気は憤然としていた。みなが教師を責め立てる目線である。

「本当に私たちの子供達だけで赤館に？」

「これは立て籠もりですか？」

「ストライキなの？」

「みなさん、待ってください。」

木村青子は声を上げたが、誰も取り合わない。校長と教頭とD組担任の浅原は生徒達の親に詰め寄られて壁際に追いやられていた。

「あなたたちはいったいここで何をやっているの？早く子供達を外に出しなさいよ。」

「いえですねお母様、私共もコンタクトをとろうとしているのですが、生徒達が頑なに立て籠もってしまっ出てこないんですよ。」

「そんな、無責任な。うちの子もみんなの子もケータイも繋がらないし、何の連絡も取れないんですよ。」

「全員西校舎にいることは確かです。しかし、いったい彼らの要求がなんなのか・・・。」

小山教頭も榎田校長も応答にしくはくしている。

「ちよつとあなた、浅原先生。いったい子供達に今度はどんな酷いことをしたの？」

「いえ、私は・・・。」

浅原は責められて、もはや何も言い返す気力もない。

そんな中、灰原浅葱の父親が間を取り持った。

「まあまあ、みなさん、落ち着いて。今はお互いが争ってる時ではありません。子供達は何を言いたいのか聞いてあげなければ。」

「でもどうやって？連絡が取れない状況なんですよ。」

杉浦浩二の母が言葉を返した。

「これは一種のストライキですよね？」

香苗純の母が不安そうな面持ちで言った。

「・・・・。」

一同は口を噤んだ。

「警察に・・・連絡した方がいいんでしょうか？」

誰かがそう言った。すると榎田校長が慌てて否定する。

「警察なんて・・・とんでもない。大事になれば我が校の信用はがた落ちですよ。あなた達のお子さんだって今まで積み上げたものが全て無いようなものになる。」

「・・・・。」

再び一同は口を噤んだ。

時刻は七時半。校庭は暗闇に包まれ。赤館の三階の一室にだけ灯がともっていた。

みなは窓をのぞき込む。西校舎三階、の一室。その明るい部屋の中から、生徒達の歌声が聞こえた。賑やかな雰囲気曲だった。

一同は、深い不安のそこに落とされていった。

おのおのが違うことを思っていた。小山教頭はこの異例の事態に自分自身の今の地位が揺るがされては困ると、ほぼ同じようなことは榎田校長もD組担任の浅原の胸にも不安をよぎらせていた。

生徒達の親のほとんどが、自分の子供の将来がこんなことで揺るがされては困ると思った。自分の子供だけはなんとしても事件に巻き込まれた被害者であって欲しいと願った。

「大変ですっ！」

職員の誰かが叫んだ。

「なんだね、騒がしい。」

教頭が怪訝そうに答えると

「マスコミが・・・マスコミが校門に押し寄せてます！」

まさかの事態に、その場は騒然とした。

いったい誰が呼んだのか？それぞれは次にお互いの顔を見合わしたが、よく考えてみる。マスコミなんかを呼ぶ必要がこの中の誰にあるというのだろう・・・。

／
2

「よく、考えてみてくれ。校長や教頭や親たち。大人達が一番困るような事ってなんだ？あいつらに対する一番の攻撃方法ってなんだ？」

「うーん、なんだろう・・・。」

片平公平は思い出していた。あの時、アカヤが最初にみんなを集めたとき。それは放課後の教室だった。教師の居ない僕らだけの教

室で、彼はもつともインパクトがあり、もつとも効果のある出だしを仲間達に伝えた。

あの時も片平公平は少し胸が痛んでいた。だってそうだろう？自分の親の悲しむ貌を想像して胸が痛まないような人間なんているんだろうか？

「ねえ、ジュン。これはちょっとやり過ぎじゃないかなあ・・・」

片平公平は隣に座る香苗純に行った。ジュンは窓際から外を眺めている。机の上にはノートパソコンが閉じられていた。

今、この教室には香苗純と片平公平と杉浦浩二だけが残っていた。他のみんなはアカヤに連れられて先に行ってしまった。三人はここで外の様子をうかがいながら後からそこへ行く予定だった。

「やりすぎ・・・？」

ジュンはコウヘイの言葉に冷めた眼差しで振り返った。

「うん、だってそうだろう？こんなことをしたら、大問題になるよ。僕達の今まで積み重ねてきたこともきっと全部パァになる。」

「なんだ、コウヘイ君はその積み重ねとやらの価値を感じていたたちかい？」

ジュンは拍子抜けしたような貌で答えた。コウヘイは首を横に振る。

「違うよ、そうじゃなくて。僕は・・・母さん達が悲しむんじゃないかって思ったんだ。だってそうだろう？あの人達は僕達がいなければ空っぽだ。僕達のために今までこれだけのことを積み重ねてきたんだ。全部ご破算になったらきつと精気吸われたみたいになっちゃうんじゃないかって・・・ちょっとそう思ったただだよ。」

「コウヘイ君らしいね。」

ジュンはニコリと微笑んだ。右頬にえくぼが浮かぶ。その笑顔がコウヘイは好きだ。

「コウヘイ。」

すると後ろから杉浦浩二が呼んだ。さっきまで教卓の椅子に座っ

て呆けーつとしていた勝ち気な少年だ。このクラスではアカヤの次、副リーダーの様な存在である。

「おまえらしいっちゃおまえらしいけどな。それじゃ、困るぜ。」

コウジは徐に腰を上げてコウヘイに歩み寄った。

「おまえは親の気持ちをよく考える良い子だよ。でもな、あいつらはおまえの気持ちなんて考えてくれたか？おまえはこんなことしたらあいつらは空っぽになっちゃうって言うけどさ。俺たちはあいつらのせいで、もうすでに空っぽなんだぜ。」

コウヘイはその言葉に反論を返すことはできずに口を噤んだ。コウジは皮肉そうに笑って続ける。

「毎日毎日さ。朝学校へ行って、帰ったら塾へ行って、日曜日もD組の選択教室が終わった後、また塾へ行く。おまえなんかその上、夜は週に2回も家庭教師が入ってるだろう？」

コウヘイはこくりと小さく頷いた。コウジは鼻で深いため息を吐いた。

「いったい今までの生活の中に、俺たちの生きる時間であつたか？どんなに勉強してもみんな勉強するからライバルは減らない。油断もできない。毎日毎日、友達がライバルだって言い聞かされてさ。いったいいつになったら俺たちの目指す目標とやらは見えてくるんだ？いつになったら楽にさせてもらえるんだ。いつになったら、俺たちは俺たちに戻れるんだ？今までの俺たちはまるで中身のない勉強マシーンだって、そう思うだろう？」

コウジは吐き捨てて続ける。

「このままじゃ、俺たちのライフスタイルから勉強ってやつが消えることはない。俺なんて幼稚園の頃からずっとだ。一時期は教材しか見えてなかった。それ以外、見させてもらえなかったもんな。見たいテレビがあつてもやりたいゲームがあつても、全部親が良しとする範囲だけで行動させられる。俺たちはおまえらの奴隷じゃないんだってのな。」

あいつらがさ。俺たちに何を求めようがあいつらの勝手かもしれ

ない。でもな、俺たちが俺たちの好きなことを求めるのも自由だろう？」

そこまでコウジが力説すると、次は香苗純が横から割って入った。「その権利を勝ち取る。それがアカヤが僕らに教えてくれたことだ。普通に自由に遊んでいる他の同年代達を見て、僕らはただただ眩しかったはずさ。変えられない、抗えない、むしろ物心ついたときから勉強をするという生き方以外知らせてもらえなかった僕らに、それ以外があるってことをアカヤは教えようとしてくれている。」

コウヘイ君。」

ジュンは優しい目でコウヘイを見据えた。

「僕は救われたい。この中身のない固い殻を破りたい。もっと多くの楽しいことを知りたいって、アカヤにあって思うようになったんだ。この革命は成功させなきゃいけない。」

それにはきみが必要なんだ。協力してくれるかい？」

コウジとジュンはコウヘイを強い眼差しで見つめた。コウヘイは二人の言葉に何の嘘も感じない。それどころか共感の渦で涙さえ溢れ出しそうなくらいだった。

みんな同じ気持ちだ。もう、後戻りはできない。

コウヘイはそう思って、二人と手を取り合った。

少女は赤館1F裏口の避難用のドアの前にD組の数十人の生徒達と固まっていた。

「いいかい、みんな。先にマスコミを誘導してきてくれている、アサギとイリヤがコウジ達に合図を出す。そしてコウジ達がこっちにやってきたら、このドアを開けて落ち合う約束をしているマスコミと会う。」

アカヤは扇形に広がる仲間達の目線の先で、作戦の最終確認をしていた。。

「アサギとイリヤは確実に成功する。西門の警備の人には悪いけど眠ってもらった。こう考えると夜の学校なんてちょろいもんだな。」

しばらくすれば警察もくるかもしれない。なんとか奴らが来る前にマスコミと接触を終わらしたい。ことは急を要するわけだ。

親や教師達の方は今のところ気にしなくていいと思う。こんなことに対応するすべなんて持っていないだろうしね。慌てふためいて、どうすることもできないさ。」

「でもさっきもなんか、校庭の方でメガホン片手に意味の分からないこと、叫んでたけどね。」

誰かが口を挟んだ。アカヤは苦笑して答える。

「聞かなくていいよ。本当に論点のずれたことばかり言ってるに決まってる。あいつらは結局自分のことしか考えてないって発想さ。」

一同はクスクス笑いながら頷いた。

「コクハ。」

アカヤがそう呼んでそれまで集団の人混みの陰に隠れていた少女は前に出た。半開きのやる気のない冷めた目つきで澁刺としたアカヤの微笑を見据えた。

「・・・なんだよ。」

「うん、きみには十人ほど連れて校舎に残って欲しい。万が一のために入り口や外部に対する警備を指揮してほしいんだ。」

「・・・ああ、わかった。まかせろ。」

「うん、ありがとう。」

適当に承諾して少女はまた、後ろに戻った。

「さすがコクハちゃん。アカヤ君から別働隊の指揮を任せられちゃったね。」

後ろに戻ると女子の一人にそう言われて少女は「・・・まあな。」

と適当に返事した。そして面倒くさいなあ、と思った。

いや、指揮を任されたのが面倒と言うより、このしゃべり方と表情を保つのが面倒くさくなってきたのだ。

最高何時間もつのだろうか？この表情……。結構きついんだよ

な。コクハの真似。ついつい、崩れそうになるんだなあ。あいつはいつもこんなに気張っててよく生きていられるもんだよ。不思議でならないね。

ここで分かったと思うが、この少女は実はセイカである。長い黒髪は全てヘアエクステンションを編んでいる。貌には白いファンデーションをつけているのである。

しかし、何故このような変装をしているのかというのも。

コクハは二日ほど前からおたふく風邪を引いて寝込んでいる。セイカはずいぶん子供の頃に一度かかっていて、もうかからない病気である。マコトがつきつきりで看病しているが、まあ、あと一週間は起き上がれない状態だった。

そんなコクハがセイカに今朝、頼んだのだ。そう、コクハが頼んだのだ。これがポイントだ。コクハという女は姉のセイカにこれまで一緒に生きてきて一度として「お願いします。お姉様。」などという言葉は使ったことがない。しかしこの時、まあ、セイカ自身が「お願いします、お姉様、と言え。」と言ったからだ、コクハはなりふり構わず、懇願したのだ。愉悦である。

セイカは、もちろん誇り高きコクハにそこまで言わせたのだから、引き受けてやることにした。その頼みというのが、D組が大変なことになってるから、潜入して欲しい。という内容だったのである。

またまた愉悦である。セイカは笑いが止まらなかった。いつもはお高くとまった妹がよもや自分に頭を下げてまでそんな面白いことに参加させようとは夢にも思わなかったのね。もちろん承諾した。もともと、セイカとコクハの外見はまったく似てないようで、実は酷似している。二卵性の双生児ではあれ、れっきとした姉妹であり、しかも顔は普通の平均的な姉妹の顔の似かたよりもずっと似ている。エクステでロン毛にして表情を作ってファンデーションで顔色を少し血色の薄い感じにすれば、もはやどちらが妹なのか見分けはつかないのである。

マコトは二卵性なのに血のつながりだけでここまで似るもん

かなあ。と変身したセイカを見て関心半分納得いかないように言っていた。それになんで普段は全然違う格好をしているんだ？とも。しかし、姉妹側から言わせれば、せっかく歳も同じ顔も似ているという入れ替わりスキルを持って生まれてこれたのだから、有効利用するために普段はその事実を隠蔽することも手品には大事な種なのだ。

まあ、そうしてセイカはここにいる。

しばらくしてアカヤの最終確認が終わると、階段の方から足音が聞こえた。そしてジュンとコウジとコウヘイがやってきた。

「アカヤ、OKだ。」

コウジが言ってアカヤの隣に立った。

「みんないよいよテレビに映る。全員こんなに自分の判断で動いたのは初めてだったはずだ。親や教師の意向をここまで無視してこれたのは本当に夢のようなものだ。でもこれで証明された。俺たちは誰の指図を受けなくても生きていける。」

まだまだ先は長いけど。がんばろうぜ。」

コウジの号令とともにみんなは緊張の糸を断ち切られ、沸いた。何か盛大な祭りじみた色彩の心境でお互いが固く握手を結びあう。

「さあ、まずは一つ。終わらしに行こうか。」

アカヤが言った。みんなは避難用の出口を開いて校舎裏に出た。するとそこは暗黒の闇夜だった。

「じゃあ、警備の配置を確認するぞ。」

アカヤ達が去った後。しばらく指示を説明して、最後にセイカは残った者達に最終確認を始めた。

「吉村、鈴木ペアは南側3・4横の避難用出口。西村、中川ペアは三階から校庭の見張り。糸山、山田、加藤は三人で玄関。小沢、古屋、野々村はフリーで見回り。見回りルートはさっき指示したと

おりだ。各自、ケータイの電源を入れて、何かあったらコール2回だ。」

「コクハは……。どこの配置なの？」

セイカが言い終わると、女子の吉村が質問した。

「私か？ 私はここ、北側避難用口で待機する。もっともリーダーに近くて、何かあった時、反応がしやすいからな。」

「そっか、さすがコクハ。抜かりはないね。」

なんてね。ただ一人になりたいだけだけどね。セイカは陰でベツと舌を出して笑った。

「なあ、ワンセグつけてみろよ。これからアカヤとみんながテレビに映るぜ。」

男子の糸山がそう言った。同じく男子の山田が目丸くして反応する。

「まぢかつ。そっか、そうだよな。あいつらマスコミに会いに行ったんだもんな。」

山田がいそいそとケータイのワンセグを点ける。電波を受信するまで数秒して、

「お、本当だ。生中継なんだけど……。」

セイカは山田の携帯電話をのぞき込んだ。携帯の小さな画面の中にはリポーターが立っていて、この至成学園の東門が堂々と背景に映っている。門の向こうには校舎も見える。門先には教頭や数人の教師達が現れていた。

マスコミが門越しに詰め寄っていて、なにやら問答している。教頭はいっこうに否定的に首を左右に振り続けていた。

山田の他にも数人のワンセグ付きの携帯電話を持っている者が違うチャンネルを見る。しかし、ほとんど全ての民法が生中継でこのネタを報じていた。

みんなは沸き立った。

「すっげえ、もうけっこう大事じゃん。」

「うわ、教頭出たっ！」

「うわ、キモっつ。」

「あはは、困ってる困ってる。」

「なあ、親たちが見えねえな。」

「カメラが怖くて隠れてんだろ。」

セイカは、はげかかった頭にライトを当てられた当惑気味の小山教頭を見て、吹き出しそうだったが堪えた。周りは教師達の困った様子に思いのまま笑い声を発しているが、今はセイカはコクハのように振る舞わなければならない。その場の柔な雰囲気になれない頑固さが必要である。

「おい、おまえら、いいからとっとと配置につけ。」

セイカはばかばかしいと言った表情で、ワンセグの映像から目を背けてみた。

「あ、そうだった、そうだった。ごめんごめん。」

山田がいたずらっぽく笑ってみんなは、ケータイを閉じて立ち上がった。

「じゃあ、解散。」

散れっ。」

セイカの号令が暗い廊下に響き、みんなはそれぞれの場所へ散っていった。

カメラマンとリポーター。あるテレビ局にだけ、極秘でインタビューを取り付けたアカヤは、今赤館に残してきた仲間以外の全ての者を連れて、カメラの前に立っていた。

赤館裏手の西門ゲート。そこは東門と違って静かなものである。その横の小さな警備員室の中。リポーターとカメラマンの二人を案内してきたイリヤとアサギは仕事が終わると冴えない貌で仲間達の中へ引っ込んでいった。

「えー、私たちは今、問題となっている至成学院の内部に潜入

し、子供達に接触することを独自に成功しました。」

若い滑舌の良いハキハキとした口調のキャリアウーマン風にスーツを着こなしたリポーターが言って、話は始まった。

「えっと、それでは質問ですが、あなた達は何故この様なことを？」

「はい、僕達は僕達の意志で今までの在り方を変えるために今回このような結論に至りました。」

警備員室は肅々と静まりかえっている。ちなみに警備員のおっさんには早々にトイレの方で縛られてもらっている。大丈夫、事が済めば解放するつもりだ。

全員はテレビカメラの赤い点灯を見つめながら、決意ある表情を見せていた。そのどこか使命感めいた雰囲気にもリポーターもカメラマンも子供相手と侮るようなことは無かった。

「その今までの在り方とは？」

リポーターがそう聞くと、アカヤは柔らかな笑みをこぼして差し出されたマイクに受け答えた。

「今までの僕達は、しいていえば孵化していない雛鳥の様なものでした。飛び立つことすら叶わない。その殻を破り青い空を見上げ多彩な未来に向かって夢を馳せることすら叶わない。その様な生活を強いられてきました。」

「なるほど、それでこういうことを？」

「ええ、だからといって何故こんなことをするのか？と訊かれればもちろん理由があります。同時にそれは要求と言えるでしょう。」

しかし、それは明確に要求と言えるものですが、はっきりとした具体的なものでは無いのかもしれませんが。しかしながら漠然とした確信に近い想いではあるのです。

これは大人達に言いたい。これは決して、僕達だけじゃない、この社会に生きる多くの同士の意志だと思っています。今日、こうしてマスクミの方を招いたのも、全国放送で呼びかけるべき事があるからと思ったからなのですから。」

そこまで訊くと、リポーターは息をのんだ。彼の口調に何か、思っていたよりもスケールの大きいことを連想させられたからだろう。「今、僕たちの求めるものは、あなた達の望む未来ではなく。生きるという意味なのです。」

僕たちの知りたいことは、世の中のレールをうまく歩く方法などではなく。僕たちの感じたいことは、生きているという証なのです。僕たちがもっとも嫌うことは押しつけられる競争そのものではなく。僕たちの辛いことは、この辛さを分かってももらえないことなのです。

僕達が目指すものは、幸せに暮らせる日々などではなく。その幸せを求めて彷徨うことなのです。

もしもあなた達が言うように、立派な大人になり、もしもいつかあなた達が望むような地位を手に入れたとしても、あなた達を見ていて、そこにあなた達自身が本当に存在したとは思えない。今のあなた達を見ていて、僕たちは未来というものに絶望しか見えてこない。

僕たちが目指すものは、あなた達が引いたレールを走ることでなく。僕たちが目指すものは、自分で信じられる道なのです。

もう一度はつきりと言います。僕たちの要求は、僕たち自身の力で自由を奪い返すことなのです。」

その頃、ポツポツと雨が降り始めていた。秋空の長雨である。夜空に冷たくさんざめく、その音が次第に強くなって、事態はその雨に流されるようにますます進んでいくのだった。

ちょうどアカヤがマスコミ演説を決め込んでいるとき、赤館北側緊急用出口でセイカは一人携帯電話を片手にある番号に電話をかけていた。

「テレビ見てるか？」

電話が繋がるとセイカはすぐに訊いた。

「ああ、だいぶ派手なことになってるな。」

血圧の低そうな返事が返ってくる。熱のせいじゃない、単にそういうしゃべり方なのはもう十分承知のことだと思う。電話の相手は家で寝込んでいる妹だった。

「あのさ、わたしは途中からおまえのふりして参加したからよく飲み込めてないんだけど、これはいったいどういうこと？」

「ん？ああ、あの裏サイトの犯行声明を見たのは、親や教師だけじゃなかったんだろな。」

コクハが言う。

「たぶんアカヤのやつはマスメディアの方にも連絡を入れていたんだろう。マスコミも進学校で有名なあの至成学院の生徒が言う言葉に少しは信憑性と話題性を感じ、裏サイトを見たんだろな。」

「ふむふむ、なるほどね。」

「で、事実その犯行声明は彼らの目に焼き付いた。確実にいたずらなどでは無い。大人達にそう確信させる大胆なパフォーマンス。全て、アカヤの計算通りだった。このマスコミとのコンタクトが成功すれば、この事件は世間に知れ渡り、こんなことをした彼奴らの受験難や就職難は必至だ、今まで親たちが気づきあげてきた高い壁は全て崩壊する。文字通り、一年D組は自由になる。」

でもおそらく、アカヤの作戦はこれだけだけでは終わらないだろうね。」

「うん、だろうな。」

「あいつはこのままストライキを続け、マスコミを通して全国に通達するだろう。一年D組だけじゃない。全ての同じ傷みを持つ人間達を味方につける。国を、社会を変えてやる。それがアカヤの志すものだ。」

「よく、知ってるねえ。」

セイカはコクハの断定的な口調に感心した。コクハは皮肉そうに答える。

「まあ、同じクラスだからな。あいつは入学当初から変なやつだったよ。」

「ふむふむ。」

「勉強もできるスポーツも万能。なにをやらせても秀でてたし、教師受けも良かった。でもその反面、どこか冷め切った感があったね。私とは変に馬があったけど、でもそれでもあいつと私は全然違ったな。今回のことでそれがよく分かったね。」

「なあ、なんで中村赤耶はこんなことをしたんだよ。なんか、前に事件があったとか、ちらほら訊いたけど。」

「ああ、実はな。これは一週間くらい前のことだけど。」

「ふむふむ。」

「D組の担任。浅原って数学の教師いるだろ？」

「ああ、あの出世欲の固まりみたいなのやつでしょう。」

「うん、アカヤはあいつと一悶着あったんだよ。」

「ふうん、初耳だねえ。」

「ああ、このことは学校側が口外無用でももみ消しにしたからね。その場に居合わせたD組の生徒と、一部の親や教師しか知らない。」
もみ消しとか・・・。

「へえ、なんか汚いな。」

「ああ。事の発端を話せば簡単。授業中に突然アカヤが浅原に掴みかかってね。そのまま浅原と取っ組み合いになって、騒ぎを聞きつけた他の教師に二人とも取り押さえられたってわけ。」

「なんで中村赤耶はそんなことしたんだ？わたしは今日初めてヤツと会ったけど、そんな無鉄砲な感じには見えなかったがねえ。」

「うん、あの時のアカヤはちょっと別人みたいだったな。」

実はさ、うちのクラスには一人、登校拒否児がいるんだけど、そいつ一学期のはじめの頃に学校来るの止めたんだ。」

「ふむふむ。」

「市原紅太って言うんだけど、そいつとアカヤは仲が良くてな。あの時もクラスの空席である紅太の席に浅原が蹴りを入れてね。ま

あ、本人は足を躓かせたって言ってたけど。たぶん故意に蹴りを入れたんだと思うよ。浅原は紅太が登校拒否しているせいで色々、担任としてデメリットが多くて被害に遭ってたからね。紅太の存在を疎んでいた節がいくらかあるんだよ。よく話の節々で”おまえらも油断しているとライバルに足をすくわれるぞ。まあ、不登校になって手遅れになったヤツも居るけどな。”みたいなことを言ってたからな。

アカヤはそんな時、いつも遠回しに反論みたいな事をしていてね。その日も、紅太の席に足を蹴り入れた浅原に言っただよ。

”先生もちやんと足下を見て歩かないと、余計な者に足をすくわれますよ”ってね。

そしたら浅原が”こんなゴミに躓いて転ぶほど私は悠長に生きていないよ”と答えたんだ。

浅原としてはいつものアレかっと言うぐらいにうまく捌いたつもりだったろうけど、アカヤはことのほかゴミというニュアンスに怒ってね。

突然、浅原に掴みかかって、思いっきり右フックをかましたんだ。あれは見事に決まってね。見物だったよ。

その後は浅原もカツとなって殴り合いの取っ組み合い。終始善戦したのは大人の浅原だったけど、裁かれたのはアカヤの方だった。その後、アカヤは無期謹慎の停学処分になったんだ。」

「ほう・・・なかなか、激しいことがあったんだなあ赤館じゃあ。」

「ああ、おまえらの校舎はいつものほほんとしてるけど、赤館はいつもピリピリだからな。」

市原紅太かあ。ちらほら聞いたことがある名前だ。たしか、一学期の実力判断テストの張り出しで成績ではアカヤと一緒にトップクラスに君臨していた気がする。

「その、市原紅太ってどんなヤツなんだ？」

「ん？私も実はよく知らないんだけどね。アカヤとは小学校以前

の頃からの仲らしい。入学して一ヶ月もしないうちに消えたからなあ。強いて言えば、無口だけど弱いといった感じじゃなかった。かなり毒々しい目つきをしていてね、アカヤが威風堂々とした百獣の王って感じなら、紅太はジャングルで一人うずくまる一匹の虎って感じかな。」

虎と獅子かよ……。嫌なたとえだな。

「ふうん。そんなやつがなんで登校拒否なんてしたんだ？」

「うーん、知らないけどアカヤとコウタが通っていた小学校のことなら知ってるぞ。幼稚園からエスカレーター式になってるかなりの英才教育の学校だったはずだ。」

「ふむ。まあ、今回の事件と全く関係がない感じではないな。」

「そうだ。だから、私の方も熱が下がってきたらコウタについてとか少し調べてみる。おまえはこのまま、そこで私として振る舞って、もしもの事態、みんなを助けて欲しい。」

「わかった。任せろ。」

言って、コクハはすぐに電話を切った。セイカはしばらく”ふむ”と考えて、緊急用出口の扉を徐に開けてみた。

外は暗がりの中、雨音がさんざめいているだけだった。

秋雨が夜空からこぼれ落ちる中、暗闇の校舎、セイカは携帯電話のワンセグを点けながらその映像をまじまじと眺めていた。

映像の中では、中村赤耶が中心に立って、身振り手振りを加えながら演説じみた言葉を発していた。

「まずこのスケジュール表を見てください。」

アカヤが言うと、隣から仲間の一人が一枚のスケジュール表を取り出した。カメラマンがそれをアップで映し出す。

そのスケジュール表の内容は大人から見ても目が回りそうな内容

だった。

朝起きて学校へ登校するところから始まるそのスケジュールは最後まで見ていくと深夜寝るまで続いているのだ。

学校が終わると、塾へ行き、一つの塾が終わると二つ目の塾へ行く。塾を橋渡しにしている。

日曜日のスケジュールが平日のスケジュールの横に表にされている。それも昼頃から家庭教師、塾と夜まで長々と続いている。まるで売れっ子芸人の生々しいスケジュールの様にびっしりと細かく、受ける科目や授業のポイントまで記載されていた。

「これは、僕らの中の一人の仲間の今週、一週間の予定されていたスケジュールです。見て分かるとおり、この時間割の中に僕らが僕らの好きなことをやる時間はありません。」

言ってアカヤは冷ややかな目でカメラを見据えた。

「もしもあなたの方大人達が情操教育という者を吐き違いしているなら、その食い違いに僕はただただ笑うしかありません。」

皮肉そうに言って苦笑する。

「このような過密なスケジュールを大人達が強いるのは、ひとえに僕の将来の栄光を願ったことだというのは理解します。しかし、その僕の将来というものがまるで自分たちの夢のようにすり替わってしまっている。たしかに僕は大人達が思うより後に自分たちの将来というものを実感し始めます。だからでしょう、大人達は僕達がまだそういう視野を手に入れてない段階から、勝手に僕の将来を考えてあげようとする。」

まだ何も分かっていない、先も見えていない僕達を好きなように導こうとする。僕達から言わせれば、そんな気持ち余計なお世話なのです。」

吐き捨てる、そしてリポーターに向き直った。

「あなたはシュタイナー教育というものをご存知でしょうか？」
聞かれるとリポーターは首を横に振って「それは？」と返した。

「ええ、とある教育学的な思想の一つですが。それでいうと子供

の成育は大きく三つの段階を得て行われていきます。その三つは統計的に見て七年周期により実にナチュラルな課程をへて変化していくものです。

第一7年期が0歳から7歳とされています。これが意志の成長と言われ、この段階の7年間で子供は自己アイデンティティーともいうような自由意志を培い、様々なものへ興味を持ち、自分の力で好奇心を解決しようとします。

第二7年期は7歳から14歳までの期間です。ここでは先の意志の成長で培った衝動をバランスの良い形に成長させ、感情的な立場が豊富に培われ、多くの感受性を培い物事へのモラルや哲学的な思考の源を形成します。そして第三7年期を迎えて14歳から21歳までに思考の成長という段階をはぐくみます。思考の成長ではこれまでの第一、第二とあった七年期に培った様々な根源となる価値観を燃やし、多くの自分独自の哲学的であれ人生観をより具体的なものへ昇華させようとしています。故に自ずと自分自身のもっとも目指すべき道を自分で見つけ、そこへ向かって思考を始めます。

こういったある種のリズムというものが人間の成長課程には必須だと思っています。それにも関わらず現在の教育制度は僕達にとって、生まれてからすぐに思考性を求め始めています。未だ、意志の成長段階や感情の成長段階の途上にいる僕らにすぐにでも目指すべき目標を与えてそれに貼り付けにし雁字搦めにとらえています。

そうすることにより多くのデメリットが生まれていることを大人達はまるで分かっていないと僕は言い切れます。

意志の成長段階を妨げれば、子供の独自性は育たず、生きている根底とも言える目的意識が気薄な現代社会の大問題をはぐくみます。

感情の成長を妨害すれば、子供が大人になったときのモラルや道徳観に決定的な欠損を生むことになり、社会悪や犯罪者を育てることになるでしょう。

そしてなにより、本当に豊かな英知と繁栄を成し遂げた大人に共通するのは自由度の高い少年時代の経験だというのは歴史の教科書

を少し紐解けば、こんな若輩の僕でも分かることです。

それでも大人達の気持ちを僕は分からないわけではありません。辛い出世時代を生きてきた僕の親は自分の子供だけは頭脳明晰であり将来社会を背負って立つような立派な大人に仕立て上げたいという気持ちが強いのは当然でしょう。

特に自分自身が勉強にとりつくのが遅れた経験などを持っていて、学生時代に勉強をもっと早くからおけば良かったと思ってしまった大人も多いでしょう。その布石が今僕達にのしかかってくるのは当然だ。その結果が受験勉強の低年齢化が促進するんです。

しかし、大人達は覚えていない。自分たちが子供の頃、勉強をしない時期にどれだけいろいろなものに触れてどれだけ感受性を培えたことかを、その価値が今の自分たちの生活をどれだけ助けてくれているかを知らなさすぎる。

人間は自分にはないものだけがすばらしく見えてしまうことがある。でもだからってそれは違う。僕達から言わせれば、どんなに頭が悪くてもどんなに勉強ができなくても、友達を友達としてみれて、自分が面白いと思えることに自分から手を出して自分の意志で自分なりに生きていける方がよっぽど幸せなんです。

僕達はあなた達が思ってるほど勉強を好きでもないし、偉い大人になんかなりたくないんです。ただ塾の窓から見下ろす繁華街で同じ年くらいの人達が楽しそうに笑って歩いているのを見ていて、うらやましいんです。

それでも、勉強をすることが嫌だっけくらいでこんな大袈裟な事はしません。本当は勉強をさせられて自由を奪われる事なんてかまわないんです。もう慣れてしまっていることなんですから。

僕達が一番不満に思っているのは、この心の傷みをあなた達が分かってくれないこと、ただそれだけなんです。

でも、もう遅い。

戦いは始まりました。僕達はあなた達を打ち倒すまで止まりません。変わることを諦めるくらいなら、僕は死ぬことを選ぶでしょう。

全国に居る仲間達へこの場を借りて呼びかけたい。僕達は今、生きています。

以上。これで終わりです。」

終始抑揚を加えながらのあつい内容を語り、終わるや否やアカヤはその場を退場した。警備員室を抜けて外に出て行く。

「あ、ちよっと待ってください。」

アカヤの長く重みのある話の内容に口をポカンと開けて啞然としていたリポーターはたと気づいて、少年を止めようとしたが、すぐに少年の後に続く生徒達が遮って。

「ええ、これは私たちが予想していた以上に、重く受け止めなければいけない問題なのかもしれません。」

リポーターが無難にまとめると、中継は合計しても十分もしないうちに終わりを告げた。このため、放送に気づいた教師達が西門に向かったときにはすでにアカヤ達の姿はなかった。

／
3

「今日は、冷蔵庫にタマネギとニンジンがあつたのでカレーを作っておきます。朝方暖めて食べてください。」

青子先生。こんな時に彼氏にメールですか？」

青子が携帯電話を閉じてはっとして後ろを振り返ると、そこには学年主任の滝原がのぞき込むようにして立っていた。人のメールを勝手にのぞき込んで読み上げておいて悪びれもせずニタリと笑っている。

のぞき見なんて酷い……。青子はそう思い怪訝そうな顔を返した。
「なんですか？」

「いえ、なんでも。しかし、ずいぶんと緊張感が薄いですなあ。

このままでは学校存続の危機かもしれないというのに。」

「……。」

滝原は意地悪くそう言って苦そうに笑った。青子は何も言葉を返

さなかった。

青子だってこんな事態に心を痛めていない訳じゃない。でも、自分一人がどうしたってしょうがないことだとは思っていた。マスコミに事件が露呈して、もはや彼らの思惑は強かに成功していたもう、自分たちでは彼らを止めることはできないとわかりきっているのだ。

「理事長。他の生徒達の親からも苦情が殺到しています。」
遅れてやってきていた理事長の小高は若く鋭敏な虫類じみた顔を歪ませて、国語科の阿部に向き直った。

「まったく・・・何という事態だ。」

口を閉じて大きくため息を吐くと、恨めしそうな目線で窓の外を眺める。そこには夜の暗がりの中さんざめく雨の向こう、やはり赤館の校舎が横たわっていた。

「校長。もはや警察に報せた方がいいのではないのでしょうか？」

教頭の小山がはげ頭に脂汗を滲ませながらそう言うと、言われた榎田校長は焦燥感と不快感にさいなまれた表情を向けた。

「きみ、そんなものまで介入させれば本校の信頼がますます下落するではないかね。このままでは来年度からの入学希望者は激減するぞ。ましてや現在在学している生徒達の中にも学校を替えようと思っている者がもうすでに多くいるだろう。経営が危うくなる一方だぞ。」

「しかし、もはやこれは一種の学生運動です。」

小山は珍しく校長に反論した。榎田校長はたじろぐ。しかし、そのとき。

「そうだ、それだよ、小山教頭。」

小高理事長が突然、教頭を指さした。

「は？」

小山教頭はキョトンとする。小高理事長はにやりとニヒルに微笑んだ。

「大丈夫だ。これは学生達のストレス発散に過ぎない。これは学

生運動だ。そうやって事を片付ける。」

「と、いうと？」

小山教頭が小首をかしげて聞き返す。すると誰かが職員室の入り口の方で叫んだ。

「理事長。大変です、警察が！」

これらは厳かな足取りで数人を連れて、職員室に現れた。厳肅とした空気を生み出す。スーツを着た男が三名。その脇に二名の制服を着た警官が立っていた。一番先頭を切るオールバックの目つきの鋭い男が職員室に入ると、ぱっと見回しただけで、小高理事長を見つけ歩み寄った。

「あなたが理事長の小高徹さんですね。」

「ええ、初めまして小高です。」

そこで初めて口を開いた男に、小高理事長は動じるわけでも怯むわけでもなく、対応する。

「こちらこそ、私は公安情報部の佐伯です。」

男は名乗った。

公安。それは公安委員会のことだろう。つまり警察である。職員室には、D組の生徒達の親と教師達が居たがその場は凍り付いたように静まりかえった。

「あの、何故、警察の方が・・・。」

小山教頭が疑問を投げかけた。佐伯という男は侮蔑的と言うべきか、横目で小山教頭を一瞥して笑った。

「学生運動で、ストライキ。わかりませんか？ こういうのを政治犯というんですよ小山教頭。」

そう言って、小山教頭の方をポンッと一回優しく手を乗せた。

「しかも彼らは全国の同年代の子供達へ暴動を促すようなメッセージを出しました。危険分子というヤツですね。」

「ねえ・・・それってどういうことっ！ 私たちの子供達は犯罪者になるっていうの！」

片平公平の母親が大声で言った。すると親たちは一斉に固まって、警察に迫り寄った。

「あなた方は親御さんですか？」

それに対して静かに佐伯は対応した。

「もちろん。私たちの子供達は被害者よ。ここにいる教師達の。」

片平公平の母親は言って、理事長や校長を指さした。

「何を言ってるんですかあなたは！元はといえばあなた達に頼まれて私たちは教育してきたんですよ。うちの学校に生徒を入れたのだってあなた達の責任でもあるでしょう。」

どこぞの教師から怒ったような言葉が叫ばれた。数人の教師達が頷いて、親たちをにらむ。

「ま、なんてことを！」

親たちは教師達を気が違った人を見るような目で憤然とにらみ返した。

「まあ、お静まりください。あなた方は悪くない。あなた方の子供さん達はきっと我々が救出して見せます。」

佐伯は嘲笑の様な笑みを浮かべながら両者の間に入った。

「この事件は、たった一人の首謀者が他の者達を扇動して起こした事件です。その首謀者、中村赤耶を連行する。それだけです。」

「と、いうわけだ。」

小高理事長は全てを分かっていたかのように、にたりと笑った。

「理事長……。」

みなは理事長の顔を見た。

すべての責任を中村赤耶にとらせる。彼らはそう言っているのだ。教師も親たちも一瞬困惑した。が、数人はすぐにそれが自分たちを助けるということを承知したのだろう。小さく頷き始めた。

そのとき、中村赤耶の母親が前に出てきた。

「待ってください。アカヤが？アカヤがいけないって言うんですか？」

佐伯に迫ると、絶望感を滲ました貌ですがるように訴える。

「あなたは中村赤耶のお母様でいらっしやいますか？」

佐伯は冷たい目線でそれを見据えた。

「うちの子は・・・お願いです。うちの子は悪くないんです。許してください。」

懇願する母親が佐伯の肩に手を乗せる。佐伯はそれを徐に振り払うと、

「お気の毒ですが。お母様はどうやら教育を間違われたようだ。残念です。」

と言った。

「そんなあ・・・」

中村赤耶の母親はそのまま泣き崩れてしまった。

「奥さんっっ！」

灰原浅葱の父親が、彼女に駆け寄り肩を抱き支える。そして佐伯をにらみ返した。

それがその日の、午後9時過ぎのこと。そして夜は再び深まっていった。外は長雨でしめって静まりかえる。赤館は大人達の騒ぎとは裏腹に旺盛にこの夜を迎えた。三階のD組の窓に明かりがともし、中では生徒達の宴が、今流行のそれぞれの好きな曲でも持ち寄っているのだろう。夜空に歌う声が少し、雨音のように響いていた。

翌日。学校は臨時休校になった。

明け方、そのD組。

昨日の夜の長雨はやんだらしい。教室の窓に日の光が差し込むと、セイカはカッと目を覚ました。自慢じゃないが高血圧なのだ。

周りを見回すと教室だった。椅子や机などは無い、空っぽの教室である。まあ、昨日のままだ。周囲には自分の他にもたくさんのD組の生徒達がところかまわず寝そべっていた。

全員、まだ寝ているらしい。

ああ、昨日の夜にみんなでどんちゃん騒ぎしたあとそのまま寝ちゃったんだ。まあ、騒いだっていっても、何一つ食い物はでなかったけど……。

その時、窓際に一人佇む少年を見つけた。

グルウルルル。

徐に体を起こすと体内からとんでもない虫の鳴き声が鳴り響いた。なんという……。

「コクハ、さすがに腹減ったかい。」

窓際の少年はクスツと笑って壁を背もたれにしてこちらを向いた。中村赤耶だった。

「ち、違う。バカ。あれだ、あれ。昨日の隠し芸の続きだ。」

セイカはあれだ。コクハは一応乙女だから、こういうとき本気で誤魔化しに入るのにまったく説得力のないことを言うので真似してみた。

するとアカヤは無邪気に笑った。

「無理するなよ。無計画だと思ってるんだろ？」

「……なにが？」

セイカは問い返して徐に立ち上がった。アカヤの方に歩み寄る。

アカヤは再び反転して窓の外を眺めながら言った。

「ふっ……長期戦の籠城になることは必須だった。兵糧の蓄えもしておかないのは愚の骨頂。」

そして隣に来た、セイカを横目に見た。

「君だったらそう言うのだろうな、と思ってるね。」

セイカはアカヤと同じように外を眺めた。下には校庭が広がっていて、正面に西校舎、その隣に大人達が居る本館。ずっと左の方にはS館が望めた。初めて見る赤館からの景色だった。この学校は大きな壁に囲まれている。でもこの高さからだ、きつと……。

「食料の用意もしておかなかったことか……。」

「うん。」

アカヤは小さく頷いた。セイカは冷めた目つきで彼の横顔をまっ

すぐに見た。

「そんなことだったらみんな疑問に思ってるだろう。」

「……。」

アカヤは口を噤んだ。

「でもみんなおまえを信じてる。何か考えがあると思って何も言わないんだよ。」

あるんだろ？ 考え。」

訊くとアカヤはため息混じりに答えた。

「……うん。まあね。みんなには悪いけど、空腹ほど良い燃料はないと思うんだ。」

「……。」

言って、アカヤは窓の外の本館の方を見つめた。

「だから最初の攻撃目標は、そう。給食室を狙おうと思ってる。」

アカヤの見つめた先はその給食室だろう。その横顔を見ていて、セイカは面白いと思った。

こうやって窓から外を眺めているアカヤは、一言で言って絵になる。そうやって高く下界から閉ざされた場所で一人閉じ込められている、そんなイメージがここまでぴったりな人はそういないと思った。

「あの壁の向こうに……。」

セイカは知らず呟いていた。アカヤは徐にセイカの見つめる至成学園の外壁を見た。そしてセイカの言葉を柔らかく受け取るように言った。

「前にね。おまえと同じようにしてあの壁の向こうを眺めてるやつがいたんだ。」

「市原……紅太か……？」

「うん。」

訊くとアカヤは小さく頷いた。セイカはさらに訊いた。

「市原は、いまどうしてるんだ？」

「あいつは……あいつのやり方でやるんだろうな。」

アカヤはそう呟くように答えた。

あいつの・・・やり方・・・。

セイカは少し腑に落ちなかったが、それ以上訊くのは止めておくことにした。思いのほか、その市原の事を考えているアカヤは、情熱的な思い出に浸ったような目をしていたからだった。

誰かが寝返りを打った。今にも目覚めそうな声が所々で聞こえてきた。

最後にセイカはアカヤに訊いた。

「・・・アカヤ、やっぱりこの戦いは今日明日で終わることはできないのか？」

アカヤは再び冷ややかな目つきに戻り、

「・・・どうだろうな。俺はそのつもりはないけどね。大人達が強行に出れば・・・。」

「出れば？」

「きつと、負けるんだろうな・・・俺たちは。」

午前六時、立て籠もり二日目が始まっていた。

その日マコトは昼前から都心の方へ出かけていった。

「コクハ、気分が悪くなったら、電話してくれな。」

いらぬ心配を言ってマコトは家を出た。一人残されたコクハは気楽なものである。

まあ、とは言っても学校の方は心配だ。セイカはうまくやってくれているだろうか？コクハは実は嫌な予感がしてならない。

おたふく風邪もだいぶ落ち着いてきて体の方もけっこう快調だった。だからだろうか、眠れない。

居間へ行ってTVを点けた。推理小説なんか適当なのをチョイスして見てみた。何度も見た内容だった。

暇だ。

しょうがないから低い天井を見上げながら。市原紅太のことなんか考えてみた。セイカにはあんなこと行っただけ、正直調べるのも、市原紅太の家は今居るこの琴乃葉家のすぐ隣だった。知りたければ隣家に訪ねに行けばいいだけなのだ。

でもなんだか、コクハには立ち上がるほどの元気はまだなかった。少しお腹が減った。

そういえば最近、市原のおばさんが貌を出さない。前まではしょっちゅう玄関先で花の手入れをしたり、お裾分けとか言って食べ物を持ってきたりしていたものだけど・・・。

あのおばさんは今回の事件には結構ホッとしているんじゃないだろうか？実際、自分の子供は登校拒否をしていたおかげで巻き込まれずにすんだのだから・・・。運がいい。

そんなことを考えていると、テレビで少し興味をそえられる内容が放送されてきた。

なんでもマインドコントロールとかいう代物について偉そうな学者がVTRの合間合間にコメントを入れている、内容だった。

「マインドコントロール・・・。」

コクハは独りでに呟いていた。

人間の心理を巧みに誘導して、術者の思いのままの方向性へとわざなう技術だそうだ。

正直、こんなものにかかるヤツの気が知れないけど、人が人に影響されるといふ事実は否定できないとコクハは思った。

今回のD組のストライキだって結局はみんなアカヤに影響されてこんな事態にまで発展したんだと思う。そしてそういう解釈はきつと大人達も好む。アカヤ一人を悪者にするのは一番簡単だし、これ以降同じ事件が起きないための歯止めもできるからだ。まあ、それにはアカヤを生け捕りにしなければいけないのだが・・・。

というのもこういう精神的な反政府組織への対処は無茶な弾圧は反感を生み、かと思えばリーダーだけを殺したとしてもそのリーダーは死ぬことにより誰も殺すことのできない不滅の存在になってし

まうからだ。

アカヤは今回の事件を革命と言った。あの時コクハもテレビでその放送を見ていた。D組の生徒達の多くが強くアカヤに対して信頼を置いているからなした事態だ。これは強い影響力というより、もはや信仰の類に近いとさえコクハは思っていた。

マインドコントロール。そんな時、テレビから聞こえてくるそのうさんくさい言葉が脳裏をよぎる。その言葉を思うとコクハは”隠れたカリキュラム”というものを思い出す。

隠れたカリキュラムとは、個体が一定の枠組みの中で属するという融合的な打ち解けを果たす為のいわば潜在的な秩序の規定である。難しく言えばこう言う言い方になるが、簡単に言えば、学校で一般的に意図して作られたカリキュラムとは別に、無意識的に存在してしまっている集団的な統一性のある精神を学校の中で生徒や教師が知らぬ間に教えあっているということである。

例を挙げれば、赤館のD組の生徒は勉強ができて社会のエリートになる存在である。という一種の強制観念が植え付けられるようなものである。他にも、不良ばかりの高校に入学すれば自分もその色に染まりヤンキーになる、女子校に入って異性を意識しない生活に入り時期に自分もその色に染まっていく、などである。どれもがその学校の教育方針にはつきりと明記されているわけでもないのに、自然と生徒達が暗黙の了解として受け入れていくものである。

これらは一言で言って影響と言えるものの延長線上にあるとコクハは思う。

昔、アドルフ・ヒトラーという独裁者が存在したらしいが、彼も一つの国家そして思想というカゴを使って人々にマインドコントロールとも言えるような強い影響を与えた。他にも歴史上には多くの革命家と呼ばれる人間達がいたが、そのことごとくが先に挙げたヒトラーのように、社会不安がみなぎった社会というカゴを使ってマインドコントロールをかけたとも言える。

マインドコントロールはいわば強い影響力と言っても過言ではな

いように思える。そしてその影響力の裏には隠れたカリキュラムという集団の中の一種の精神、そこに隠されたひとかけらの被害者妄想が必要になるとコクハは思っているのだ。

今回のD組の事件ではその背景となる隠れたカリキュラムには常識化した生徒達の抜け出せない不満があった。それをアカヤが増幅した。しかし、それだと腑に落ちない。アカヤはどうして抜け出せたのだろうか？他のみんなが無意識的に雁字搦めにされた束縛から彼だけは反抗しようと決意することができたのだろうか？そのきっかけが、分らない。

コクハは思っていた。あの時、中村赤耶がクラスメート達を最初に集めた時、最初に口にした言葉を

「みんなは騙されているんだ。」

彼は一言目にそう言った。

コクハは疑問だった。そして今でもふと疑問に思う。

あれは、本当にアカヤの言葉だったのだろうか？と・・・。

／
4

生徒達はこの日、マスコミを相手取って学校側に食料の要求をした。しかし、学校側は「彼らが立て籠もって話し合いに応じない限り食料の受け渡しは困難である」と主張して要求は受け入れられなかった。

木村青子はこの日、近くのスーパーでパンやドリンクなどを買って、学校の裏手の通りで、ある少女を待っていた。

学校裏手の通り、至成学院の外壁が道の側面に長く伸びもう一方には住宅や駐車場などが建ち並ぶ長い一本道だった。

昼間はほとんど人通りの少ないガランとした道路の一角の寿司屋裏手の駐車場前で青子は車から降りて、フロントネットに寄りかかっていた。

脳裏には”食料の用意もしないで立て籠もるなどと”と嘲笑する

教師達の貌が思い出されていた。

「馬鹿なことは言わないでください。あの子達は本気です。たとえ飢え死にしたって降参なんかしません。」

あの時、教師達の中で一人青子は生徒達への食料の配給を訴えた。もちろんそんな言葉に誰も聞く耳を持たなかったが、青子は引き下がる気はなかった。

私一人でも生徒達の気持ちに答えてあげなければ……。

そう思った。

そして今、青子はここにいる。時期にその少女は現れた。

ツインテールの毛先にソフトソバージュをかけた自分の担任しているクラスの生徒。藤本利香だった。

「先生っ！」

連絡を受けてすぐ走ってきたのだろう、フジモトは息を弾ませながら青子の前まで来ると中腰にかがんで息を落ち着かせた。

「藤本さん。来てくれて助かったわ。」

「うんう、それで、みんなは大丈夫なの？」

フジモトは息を落ち着かせてまっすぐ立つと眉間にシワを寄せて青子を見据えた。

「それが、そのことで頼みがあるの。」

「え？」

フジモトが小首をかしげると、青子は車の後ろに回ってトランクを開いた。

「テレビ見たでしょ？みんな食べるものが無くて困ってるみたいなの。」

フジモトは徐に青子の後続きトランクの中を見た。

「だからこれ、」

「うわぁ、大量だね。」

トランクの中にはスーパーのビニール袋6つ分の多くのパンやドリンクが入っていた。フジモトは目を丸くして驚いた。

「うん、全員分だと少ないくらいだけど……。気休め程度でも役

に立てればと思って。」

「これを？」

フジモトは視線を青子に向けて訊いた。

「うん、藤本さんに届けてもらおうって思ってた。」

言うのと数秒フジモトはもう一度その大量の食料を見つめて

「・・・わかった。でもこんな勝手なこととして、バレたらやばいんじゃないの？」

訊かれて青子は首を横に振った。

「私のことはいいの。今はみんなの心配をしてあげて・・・。」

「・・・うん。わかった。」

フジモトは静かに頷き、次に至成学院の高い塀の向こうを見上げた。その目線の先には赤館の赤い校舎の頭が突き出していた。

「もう、あいつらに望んではいけないんだ。俺たちは奪い取らなきゃいけない。自由も食い物もだ。」

杉浦は憤然として言った。みんなはその血気に満ちた顔をマジマジと見つめる。D組の生徒たちはこの教室に集まり、そしてそれぞれで静かに目を閉じていたアカヤが口を開いた。

「作戦は夜。実行に移そう。」

目を見開き仲間たち一人一人の顔を見つめる。

「給食室を攻撃する。覚悟はできてるな。みんな。」

アカヤにしてはドスのきいた言葉が教室に響き渡る。仲間たちは一斉に声を上げた。

血気盛んなのは空腹がもたらせたものではない。大人達に対する怒りはこの二日目でピークに達していた。

セイカはその様子を見つめて、少しわくわくしていた。これからやっとおもしろいものがみれる。モラルに欠けた発想かもしれないが、この漲った情熱的な雰囲気の中で、セイカのような好奇心の塊

が期待感と熱気を楽しまないはずもないのだ。

もう、もしもの時、食い止めてほしいというコクハの言葉など振り返ってはいられない。

みんなの活気あふれる雰囲気セイカも心の底から混ざっていった。

「みんな、ちょうどいいところに差し入れが入ったぜ。」

そんな時、誰かが言って教室に入ってきた。それは裏口の見張りについていた伊藤一樹という男子生徒だった。そしてその後ろにはまた久々な顔が立っていた。

「フジモトっ。」

アサギが言って立ち上がった。フジモトは不安そうな顔でD組の生徒達を見つめる。その全員が色を合わせた服装を見てただならぬことを再認した。

「フジモトがパンとジュースを届けてくれたんだ。」

伊藤一樹が言って両手のビニール袋を杉浦に渡した。

みんなはフジモトを手厚くねぎらって迎えた。

「よし、これで体力をつけて、がんばろう。」

杉浦が言って、みんなは丸一日以上食べてない腹を満たしにかかった。やっとなりつける食料、それが例えパン一個とジュース一杯でもみんなの顔にますます生気が漲った。

食事の途中、フジモトはセイカに訊いてきた。

「コクハ、本当にこんなことしていいの？」

セイカはうまく返す言葉が見つからない。それでも心配そうなフジモトを見つめて、コクハラらしい言葉を返してみた。

「おまえは、外で見ている。きっとみんなは無事に、終わらせてみせるから……。」

フジモトはほっと息を吐いた。

「コクハはやっぱり……。」

よかったと胸をなで下ろす。フジモトはどうやらこの状況をよく思っていないらしい。友人のコクハがアカヤのやってることに賛同

してここにいるのではないと知ると安心した。

「正直、アサギやイリヤまで参加してるなんて信じられなかったよ。」

フジモトが言うのと隣でアサギは笑った。

「あたしは正直、よくわかんないんだよ。」

言ってどんちゃん騒ぎをしている向こうの連中を眺めた。

「ほら、あたしって半分C組みたいなもんだから。D組の落ちこぼれでさ。みんなみたいに塾に通ったり家庭教師に習ったりしてないし、正直そこまで雁字搦めにされたって気もしてないんだ。」

それはコクハもイリヤも同じだ。コクハ、イリヤ、アサギ、はD組では唯一自分で勝手に勉強してD組にいる。いわば自己意志だから、親にどうこうしろと言われて生きてきたわけでもなかった。だから本当は他の生徒達のような束縛感など知らない。

それでもここにいるのはイリヤもアサギも同じ気持ちだった。

「私たちはね。D組を、アカヤくんを止めたいの。あの人、本当に思いこむと何をするかわからないんだもの。」

イリヤがため息混じりに言って、向こうでみんなの和の中にいるその少年を見つめた。

「まあ、とにかくさ。集団自殺とか、しゃれにならないことにならないように気をつけてるよ。」

アサギが縁起でもないことを言ってフジモトは驚いた。

「集団っっ！」

「し、静かにしろよ。」

とっさにアサギが注意した。

「だからさ、この立てこもりは人質事態があたし達だっていってんじゃない。」

「それって・・・？」

「うん、場合によっては自害してでも大人達と戦う。少なくともアカヤはそのつもりだよ。」

セイカは無表情な顔でそう告げてやった。イリヤは目を伏せる。

アサギも口を閉じて大きくため息をはいた。

フジモトは恐ろしそうな顔をして

「でも、みんなはそんなことしないよね？」

アサギもイリヤももちろんと頷いた。セイカはずっと向こう、みんなの和の中で笑っているアカヤを見つめて

「でも、あいつはきつとその気なんだろうな。」

そう言ったセイカに続いてイリヤ、アサギ、フジモトもアカヤを眺めた。

ワイワイ賑やかな中、みんなの中心に座るその少年の楽しそうな微笑みを、ずっと眺めていて少なくともセイカは、熱が冷めていくのを感じた。この活気あふれる雰囲気冷めてきてしまったといったら飽きっぽい感じがするけど、セイカはアカヤの微笑みの裏側にある決意を思うと、なんだか全ての酔いが引いていくような血の冷めていくのを感じるのだった。

フジモトが赤館をでたのは午後六時過ぎのことだった。あたりはもうすっかり夜の闇に落ちていた。フジモトは赤館から出てすぐ東門に向かったが、西門の方は夜になってもマスコミなどが張ってライトの光が明るかった。

フジモトはそんな物々しい雰囲気を見つめてから深くため息を吐き、東門を出た。

今も何か、胸の中にもやもやした嫌な予感が立ちこめていた。それは赤館に食料を持って行く前からあった嫌な予感だ。そして赤館に入ってコクハ達にあった後もその胸のもやもやを拭うことはできなかった。その原因がなんなのかまだフジモトはこの時分かっただけ居なかった。

東門を出てしばらく一本道を歩くと、ふと足を止めた。目の前の電灯の下に一人の髪の長い女性が頭を抱えてしゃがみ込んでいたの

だ。

徐に近寄ってみるとその後ろ姿はフジモトのよく知っている女性のものだった。

「アオコ・・・先生？」

フジモトは女性の後ろから小さく声をかけた。頭を抱えて低くうなっている。頭痛だろうか？

声をかけても返事をしない。フジモトは訝しげにもう一度声をかけた。

「こんなところでどうしたんですか？頭、痛いんですか？」

女性はすぐに返事を返してこない。数秒して、何事もなかったかのようにすっと立ち上がった。そして振り返る。それはやはりアオコだった。

「あら、こんばんは。」

本当に何事もないようにケロッと微笑んでアオコはフジモトを見た。それでもフジモトはアオコの様子がいつもと違うように感じた。まず瞳が少し黒ずんでいる。とゆーか黒目が大きく感じる。表情もいつものような穏やかな雰囲気とは少し違った。無表情といったら野暮つたいがしいていえば顔色というものが気薄に見えた。少し、人形のように思った。

「どうしたの？」

アオコはフジモトが訝しげに見つめるので訊いてきた。

「いえ、アオコ先生・・・気分でも悪いんですか？」

「どうして？」

訊かれてアオコは小首をかしげた。

「いえ、なんかいつもと違う感じだし・・・何かあったの？」

「なにも、無いわ。それより、少し付き合ってくれない？」

「え？」

突然誘われてフジモトは狼狽えた。アオコは嘲笑混じりに微笑む。

「ね、少しだけ・・・。」

そう言われると断り切れない。アオコに誘われるまま、フジモト

は夜の街へと入っていった。
この時、フジモトはある種の疑問におそわれていたが、それがいったい何なのかまでは分からなかった。そしてその正体こそ、自らの胸をよぎる嫌な予感というものだということも、今はまだ知らなかった。

／
5

「いいかい、みんなルートを確認するよ。」

アカヤが仲間達の目線の先で言った。

赤館D組教室。そこで一同は最後の打ち合わせをした。大作戦になる。生徒達の中には野球部のバッドや剣道部の竹刀などを持って武装したものも居た。

黒のトップス、赤のボトムス。そんな統一性のある派手派手しい格好をした少年達一人一人の目が強烈に血走っていた。みんなやる気なのだ。

「まずコウジの三班と乙供の五班は赤館一階の渡り廊下Bルートだ。なるべく派手にやって大人達を引きつけて欲しい。」

「OK。」

言われて三班、五班の班長である杉浦、乙供が意気込んだ覇気のある返事を返した。アカヤはコクリと頷く。

「次に二階の渡り廊下からジュン達の二班だけど、こっちも派手にやって欲しいと言いたところだが、大丈夫そうだな。」

「うん、これがあるからね、嫌でも派手になるよ。」

行って香苗純は両手に何か粉の様なものが入ったジュースのボトルを出して見せた。後ろの班員達も同じようなものをもって掲げた。それは過酸化アセトンというタイプの爆薬である。香苗純は電気関係ではPCの扱いなどに詳しいがその他にもこういった化学も得意分野の一つである。

この過酸化アセトンとは一定の濃度の過酸化水素水とアセトンを

均等に混合し、さらに濃塩酸を加え、最後にろ過して乾燥させれば出来上がる簡単に作れる爆薬で、材料も比較的日常生活から手に入れることが可能なものだ。この場合、理科室の実験室の倉庫から盗み出したものでほとんどの調合をした。

この爆薬は熱を加えたり衝撃を与えたりするとバーストしてしまう。かなり手短に作れる爆薬として有名な種類でアカヤに頼まれてジュンが即席で用意したものだ。威力としてはもちろん量によるが今、ジュンが用意した一個あたりが手榴弾一発分に相当する火力があると言えるだろう。

「小沢の六班は赤館で待機だ。もしもの為の逃げ道である城をもぬけの殻にするわけにも行かないからね。」

アカヤがそう言うのと、女子の小沢はコクリと頷いた。

「よし、じゃあ、俺の一班と入谷の四班で本館の裏側から侵入する。」

アカヤは最後に自分たちのルートを確認すると締めくくりにこういった。

「いいか、みんな。これはただ食料を奪うだけじゃない。隙さえあれば本館を制圧する。教師達の何人かも人質としてとれば尚いい。わかったね。」

一同はその言葉にいいよだと気を引き締められた。これは戦いなんだ。盗るか盗られるかだ。

そして、決行の合図がされるわけでもない。アカヤが最初に一班を連れて教室を出て行くと次々と他のものも教室を去っていった。

セイカはこの時、イリヤの四班の中にいた。この班決めは実はクラスの学級活動の時のその班のままで、いつも一緒にいるものたちが組んだ方が相性もいいだろうというアカヤの考えだった。

だから、イリヤもアサギもセイカも一緒である。男子三人女子三人の四班はアカヤの一班に続いて至成学院本館の裏手に回った。

午後7時。その時、至成学園は闇に静まりかえっていた。昼間東門に群がっていたマスコミもこの頃になると数を激減させ、ちらほらと様子をうかがうものだけを残して退散していた。赤館に何の動きも見えない為か本館も静謐に佇んでいた。本館では職員室の窓明かりだけが唯一明かりがともっていてそれに対抗しているかのように赤館のD組の窓明かりも灯っていた。

この夜、至成学院の施設で明かりが灯っていたのはその二つの箇所だけだが、実際には闇の中でD組の生徒達は行動を開始していた。セイカがいるイリヤの四班はアカヤと一緒に赤館の裏口から外に出るとそのまま迂回して本館の東側裏手まで回った。そこから一階美術室前の窓ガラスにガムテープを貼り付け、窓ガラスを音を立てずに割ると鍵を開けて中に入った。

何日ぶりの本校者だろう。廊下は真っ暗で窓の外の闇夜でさえ明るく見えた。事実、夜の青白い明かりが窓からは差し込んでいて、それだけが目に見える唯一の手がかりだった。懐中電灯は各自赤館校舎に設備されていたものを持っているが今はその電気を灯してはいない。

不気味なほど静かな校舎だった。

「いいかい、みんなまずはここで待機だ。ジュン達が爆薬を使う音がしたら、スタートだ。いいね。」

アカヤが小声で囁くように言った。みんなは無言で頷く。

セイカは少し気がかりに思ったことがある。

「それにしても静かだな・・・。」

それについてすぐに口に出してしまったのは少しコクハラしくな気とは思ったが、この時セイカはそんなことを気にしないほど嫌な予感がしていた。

「静かだよ。夜だからね。」

アカヤが問題ないと答える。

「それにあれだ。昼間は警察も学校側も校庭で説得やら何やらっ

てうるさくわめいてたからさ。今が静かに感じるんだろ。」

それならいいけど・・・。セイカは思っけて口を噤んだ。本当にこの静けさが裏の無いものならそれに越したことはない。しかし、ここまでアカヤはだいぶ大人達を侮ってきたけど、彼らはアカヤが思っけるほどバカでは無いとセイカは思っていた。

だからだろう。この暗闇の廊下、そして夜の静けさ、静まりかえった校舎。それに逆に安堵感は覚えなかった。

それに、アカヤはたぶん、中学一年生相手に大人が侮らないはずはないと決めてかかっているのではないだろうか。そしてその隙を突いていけば容易いことだと思っけるのではないだろうか・・・。セイカはアカヤの意外に樂觀的な自信家な部分に氣づいていた。だからなおさらここに来て不安に思っけるのかもしれない。

そうしてしばらく、それぞれは静かにその場に待機した。かくして数分後、強烈な爆音と校舎の壁を振動させる揺れを感じて一同は戦いの火ぶたが下ろされたことを確信した。

最初にアカヤが叫んで号令した。

「みんな、行くぞっ！」

目標は給食室。セイカ達のいる美術室前からは長い廊下を一直線に走っけていけば右手にその巨大な鉄の扉が見えるはずだ。そこを突破するにはジュンの作っけた過酸化アセトン爆弾を使っけて扉を吹っ飛ばすつもりだ。一部だが、アカヤはその分だけの爆薬をジュンから受け取っける。

一班と四班、合計十二人の男女は本校者の一階廊下をひたすらまっすぐ走った。イリヤとアカヤの班長二人は片手に懐中電灯の光を灯し前方を照らす。

セイカ達の走る本館の東側とは反対の方、西側の二階と一階の渡り廊下では今、仲間達が大騒動を起っけることだろう。かすかだが鬨の声が聞こえてくる。騒がしい雪崩のような叫びだ。激しい戦いになっけるのだらう。

みんな無事だといいいけど・・・。

セイカがそんなことを考えているうちに給食室の前にたどり着いていた。

「デカイ……」

誰かが言った。考えてたよりも大きな扉だった。懐中電灯で照らすと鉛色に鈍く照り返す表面の頑丈そうな分厚い扉だ。こうして間近ではっきりと目の前にすると給食室というのは学校の中でも嚴重に占められた場所であることが分かる。

それでもアカヤは動じない。余裕の表情でみんなに言った。

「みんな下がっててくれ。こんな扉ぐらい簡単にふっ飛ばせるさ。」

みんなはゴクリと息をのみながら後ろに少しずつ少しずつ後ずさりした……。

その時だった。

何か固いものがセイカの背中に当たった。

はてな？と思った。

後ろは今走って通ってきた廊下。そんな場所に壁があるはずもない。暗闇の中、方向感覚でもなくして壁に触れてしまったのだろうか？

しかし、その疑問はやがて絶望的な答えへと変わった。なぜなら、すぐに廊下に電気が走ったのだ。

灯りが駆け抜けるように廊下に色をつけていく。あたりは真っ暗から急に明るくなって、セイカ達は眩しさに目を眩ました。

そして同時に、自分たちが晒されていくのを感じた。闇が包んでいた安心感が脱がされ、そして”見つかった”という感覚が脳裏を浸食した。

眩しい眼を細く開き後ろを振り返ると、そこには十数人以上の長方形の盾を持ったヘルメットを深くかぶった黒い集団が並んでいた。異様な光景である。

しかもセイカはその集団の中の一人のシールドに背を当てていたのだから驚愕だ。

「いいつつつ!!!」

セイカは思わずのどから声を上げて、猛スピードで反対側へ走ってアカヤの後ろで止まった。他の仲間はその素早さを見て少し呆氣にとられながらも習うようにアカヤの後ろへ行った。

嫌な予感が当たった。セイカは唇をかんだ。

待ち伏せかよ・・・。

黒い集団達はまだ動かない。集団の先頭には一人の男が立っていた。他と違って武装していない。黒いスーツを着て髪の毛をオールバックに上げている。ニヒルな笑みを浮かべてアカヤを見る。アカヤも必至ににらみ返した。

「チェックメイトじゃないか？中村赤耶君。」

男は嘲笑しながら告げた。アカヤは言い返さないで男を睨み続ける。

すると男は突然マジな貌になった。そして片手を徐に高らかと上げた。

刹那、

後方に控えていた十数人の集団が動き出した。しかし、アカヤの方はその対応に遅れはとらなかった。すぐさま叫んだ。

「みんなっ、逃げるぞっ!」

その言葉を仲間達は瞬時に理解して反転して走り出した。しかし、すぐ目の前の部屋からまた別の黒い集団が現れて道をふさがれた。

まさかの事態。前門の虎後門の狼というわけだ。どうするか？セイカが焦った。

刹那、

目の前を白い光が猛烈に閃光した。鼓膜を吹き飛ばすような爆音が突き抜け、セイカ達は大型台風のような爆風に吹き飛ばされ這いつくばった。

アカヤが、敵に過酸化アセトンの爆弾を投げたのだとセイカはすぐに思った。セイカも一瞬考えついていたことだ。

アカヤの判断のおかげもあって、敵は防護シールドで防いだもの

の怯んだ。その隙を突いてセイカ達は走った。

「急げっ！」

アカヤが言った。その時、黒い集団達はゾンビのように動き出し、アカヤに突進した。しかし、仲間達がそれを阻止する。アカヤの盾になって、黒い集団に押し倒されて次々に捕獲されていく。

しかし、そのおかげでアカヤは逃げた。セイカも必至で走った。なんかあんなやばそうな奴らに捕まりたくはないと思ったのだ。心臓がはち切れるくらい走った。てゅーか人間やっぱり逃げるときこそ本当の走りというものができる。かなりの速さで走った。それに武装していた黒い集団はその分素早さに欠けているのだろう、なんとかかなりの差を点けたところでアカヤが言った。

「横に入って階段だっ！」

「OK」

即座にその意味を理解してセイカは曲がって階段を駆け上った。おそらくあのまま走り続けて西館の方へ続く渡り廊下にたどり着いたとしてもそこには仲間はいない。あの黒い集団を見たときに予想できたことだった。

セイカが階段を駆け上り始めると後ろからついてきたのはアカヤとイリヤとアサギの三人だけだった。

「なあ、あいつらいったい何だよ！」

アサギが走りながらわめいた。

「おそらく機動隊だろうなっ。」

「き、きどうたいっ!？」

アカヤが答えるとアサギは驚愕した。

だってそうだ。機動隊ってそんなものがよもや中学生のストライキごときに参加してくるなんて誰が予想しただろう。

「で、でもなんで？わけわかんねえー。」

「まあ、おちつけ詳しい説明は後だ。今はとにかく走れ。」

アサギが走りながらぶーたれるとアカヤは言って、四人は階段を駆け上がり続けた。

「あのお？」

駅前の洋風のおしゃれな飲食店。その窓際の席でフジモトは不可解そうな貌をアオコに向けた。

「ん？」

アオコはケロっとした表情でドリンクを長いストローで吸いながら上目でフジモトを見た。

「ん？ じゃないですよ。こんな時にこんなところでこんな事してていいんですかあ？」

「さあ？」

アオコはクスツと鼻で笑って

「何か食べ物頼んだら？」

”お腹、空いたでしょ？”と話をそらした。

フジモトはますます”む”と困る。そしてアオコを怪訝そうな眼差しで睨んだ。

「だからあ、そんなことしてる場合ですかあ？」

「そんなこと？・・・食べることは大切よ。そうでしょ？」

アオコはきょとんと不思議なものを見るような目でフジモトの貌を眺めた。フジモトからしてみたらまるでバカにされてるように感じるぐらいだった。

「いや、そういうんじゃないくてさあ。」

さすがのフジモトもうなだれながらため息を吐いた。

「D組のみんなのこと心配なんだ？」

そんなフジモトを眺めてアオコは言った。まだドリンクの氷の下に残ったジュースをストローで残らず吸い取る音をズズズとたてながらだ。

「あ、当たり前ですよ。」

フジモトは顔を上げて口をとんがらせて言った。アオコはまた何

が可笑しいのかクスツと小さく笑った。

「ねえ。」

「はい？」

アオコは飲みきったグラスの中の氷をストローで徐にかき回しながら喋った。

「あの子達のやってることって、どう思う？」

「ど、どうって・・・。」

フジモトは訊かれて少し戸惑った。

「あたしは気持ちは分からない訳じゃないけど、やっぱり悪いことだと思います。あんなやり方いけないと思います。」

フジモトがそうはっきりと言うとアオコは首を小さく横に振って嘲笑のような笑みを浮かべた。

「ふふ。わたしはそうは思わないわ。」

「？」

フジモトは小首をかしげた。アオコの目の色が毒々しく黒くなって沈んでいくように感じたのだ。

「だいたいね。世の中の善悪っていったい誰が決めたのかしら？」

「先生？」

アオコはかき回す。グラスの中の氷は回転する。

「そんなもの社会の常識に決まってるわよね。さっきあなたがD組の子達のやってることを批判できたのも社会の常識と照らし合わせて正当性に欠けると感じたからだもの。」

でもその社会の常識は正義なのかって言ったら必ずしもそうじゃないのよ。だから今回みたいな事件が起こったの。」

アオコはますます能弁に不明な内容を語り続ける。

グラスの中の氷はゆっくりと溶けていく。フジモトは胸を浸食する嫌な予感が立体的になっていくのを感じ始めていた。

「元はといえば、正しいとか間違ってるとか、そんなものいったいどこから来てどこへ去るのか・・・。」

わたしはね。」

アオコはそう言ってフジモトの目をまっすぐに見つめた。その黒い眼差しに見つめられてフジモトは背筋に凍るような悪寒を感じて、同時に息の止まるような身動きのとれない錯覚を覚えた。

「良いとか悪いとか、そういうことを問うこと自体が間違ってると思うの。みんな好きなように生きればいいじゃない。」

だって、そっちの方が幸せだもの。」

恐怖に引きつり始めるフジモトの貌を眺めてアオコはすっかり笑顔になっていた。黒色に浸食された瞳がますますダークに暗く沈んでいく。

「そう言う意味ではね。わたしはあの子達は間違っではないと思うわ。・・・主張も・・・行動もね。」

「つつ・・・。」

フジモトはこの時、今日D館に食料を届ける前からしていた、妙な胸騒ぎに確信を覚えはじめていた。

「ねえ、どうしたの？ 利香ちゃん。」

そしてアオコはそう呼んだ。フジモトの中でソレは明確な真実になった。確信はよりリアルに目の前で形になった。

フジモトは低い声で震えながら言った。

「あ、あなた・・・いったいだ、誰なの？」

訊くとアオコはニタリと微笑んでグラスの水をかき混ぜる手を止めた。グラスの中の氷は溶けて水になっていた。

／6

セイカとアカヤとイリヤとアサギの四人は階段を上って屋上の前に至った。

そこまで来て聞き耳を立てても誰かが下から登ってくる音は聞こえない。どうやら追っ手はてんで違う方向に行ったようで四人はひとまず助かったようだった。

屋上に続く扉は固く鍵を閉められていたが、高い位置にある窓は

開いていて夜空をのぞかしていた。夜のかすかな灯りがほの暗く屋上前の踊り場を照らす。

アカヤが無言のままイリヤを肩車して、次々にそれぞれが助け合って登って窓を抜けて屋上に降り立った。

夜の屋上は月明かりだけが不気味に視界を露わにして、口ごもった静謐さに沈んでいた。誰もいない感が漂う。屋上というものはいっただってそうだが、この時はことさら静かに感じた。

四人はおりてくるとすぐに壁により掛かって一息ついた。誰も言葉を発さない。しばらくしてお互いの貌を無言で見つめる。それぞれが黒い炭のようなもので汚れたり、アカヤなんか爆発の時に何かの破片で切ったのだろうか……。眉間とおでこに切り傷ができていた。

敗戦のムードが立ちこめた。月明かりの下沈黙が続いた。

屋上のフェンスの向こうを見ると蒼黒い空が見える。でももつと前に進めば下には金城の街やもつと下には自分達の根城である赤館も見えるだろう。仲間達はみんな捕まってしまったのだろうか……。

アカヤはゆっくりと立ち上がりそのフェンスの向こうへ歩き出した。

一步、二歩、三歩。

すると向こうの貯水タンクの陰で何かが動いた。アカヤは足を止める。

貯水タンクの陰からぬつと二つの陰が出てきた。

四人は凍り付く。

まさかこんなところにまで待ち伏せか、と。

「あ、アカヤ……達なのか？……。」

ところが様子をうかがうような少年の声が聞こえてきた。するとアカヤが急にクスクスと笑い出す。

「なあんだ。ジュンとコウジそれにコウヘイもか。みんな考えることは同じだな。」

「ああ、赤館には戻れないみたいだったからな。ここしかなかった。」

そう言って目の前に現れたのは杉浦浩二だった。その後ろには香苗純と片山公平の二人がついていた。

双方に安堵の声がこぼれた。

ジュンやコウジやコウヘイの班はあの黒い集団にほとんどが捕獲されてしまったらしい。なんとか助かって逃げてこれたのがこの三人だそうだ。

香苗純、杉浦浩二、片山公平の三人と合流して合計七人は暗く静まりかえる本館の屋上から遠い下界を眺めた。

フェンス越しに見下ろすそこには校庭から本館裏の駐車場に至るまで黒い武装をした男達がライトを片手に何かを探し回っていた。まるで頭から光りを発する働き蟻のようだった。おそらく彼らが探しているのはここにいる七人だろう。

校庭は学校の運動部のための屋外照明が灯されていて十分に視界が開けていた。

西側の赤館の方を見に行くと、その赤館の校庭に面した玄関口から数人の男女が黒い武装の男達に連れられて出てくるのが見えた。連行されているといった様子なのか保護されているといった様子なのかは愚問だ。赤館の守りに残った連中も捕まったようだ。

赤館から本校者へ続く二階と一階の渡り廊下は悲惨なほど戦いの跡を残していた。二階の渡り廊下に至っては廊下が一階に陥没している。全体的に黒こげだった。

「ずいぶん、派手にやったな。」

アカヤが右後ろのジュンを横目に見て口火を切った。ここで下の様子を見始めてから初めての会話だった。

「うん、盛大だったよ。盛大に負けた。あっというまに囲まれちゃったよ。僕達の行動は全部先読みされてたらしい。」

ジュンは苦笑して応えた。その目線の先には米粒ほどの小さな蟻

たちの探索が映っていた。

「でも、あいつらいたい・・・。」

コウジが呟くように言った。アカヤが応える。

「うん、あれは機動隊だよ。」

「き、機動隊？」

コウジとジンはぎょつとして同時に聞き返した。アカヤは頷く。
するとアサギが言った。

「それだよ。アカヤ、意味わかんないぞ。あいつらが本当にその機動隊とか言うやばいヤツだとしてなんでそんなヤツらがあたし達を？」

アカヤは訊かれて一瞬、間を置いて

「つまりね。どうやら俺たちはテロリストとして認定されたらしい。」

平然と言った。一同はなんといっているのか、言葉も浮かばない。

アカヤは続ける。

「やっぱり一番いけなかったのはマスコミ演説かな。あれのせいで全国区に知れ渡ったり警察の上層部のそういった人間の耳にも当然届いた。それに裏サイトでの苛烈な俺の演出で、過激派の学生運動としてのレッテルを貼られるに至ったんだろうね。まあ、その辺間違っていないけど・・・。」

それでこういった思想的な学生運動は早めに摘み取らなければほとんどん拡大して異例の事態になりかねない。そう考えたのかもしれない。現にマスコミ演説で俺は全国の同士達といって呼びかけを行ってしまっているからね。

それでもこれは上層部にそうとうな専門的な人間がいると思う。じゃなきゃこの対応は迅速すぎる。正直、俺は大人達をなめてたよ。中一の子供がやることにここまで本気を出してくるとは思っていなかった。」

「アカヤ、おまえはそこが甘いよ。」

セイカはここで口を挟んだ。

「・・・コクハ」

アカヤは呟いて、みんなはセイカを見た。

「いいか。受験勉強も然り精神年齢も然り社会問題の多くが低年齢化している昨今で、警察が捜査と取り締まりなどでより低年齢の人間まで怠りなく管理しようとするのは今や基本なんだよ。」

「そうなんだな・・・。まったく最悪の事態だよ。」
言われるとアカヤは珍しくうなだれた。

「俺は・・・責任をとらなくちゃいけないな。」

そう言っただけでアカヤは徐にフェンスに掴みかかった。みんなはアカヤが何をしようとしているのかわからずそれを眺めた。

そうしているうちにアカヤは素速くフェンスを乗り越えて向こう側に立った。

「ちよつとアカヤくん？」

イリヤがはつとしてフェンスの向こうのアカヤに詰め寄った。

「いいんだ。イリヤ。」

アカヤは言う。

「たぶん警察も世の中も君たちを裁くことはない。悪いのは全部、俺だ。それでも俺は俺が間違っていたとは思わない。」

一同はイリヤと同じくフェンスに寄ってアカヤと対峙した。

「アカヤ、早まるのはおまえの勝手だけど。俺たちを置いていくな。俺も一緒だ。」

「僕もだよ。アカヤ。」

コウジとジュンは言っただけでフェンスを登ろうと手をかける。しかし、アカヤは怒鳴った。

「ダメだ！」

ジュンとコウジはアカヤの訊いたこともないような怒声に動きを止める。

「ジュン、コウジそれにコウヘイ。」

そう言っただけでジュンとコウジ、そしてその後ろで恐ろしそうな貌をしているコウヘイを見た。

「君たちは生きろ。みんなもだ。」

次にイリヤ、アサギ、セイカを一瞥した。

「俺はみんなの分も乗せて飛びたい。みんなは俺の分もこれから歩いて行って欲しい。」

考えてみてくれ。本当はこの世に生まれてこれただけでも嬉しいと自由だと思えなきゃいけないんだ。それにもう、みんなは自由だ。これからは自分の好きなように生きれるんだ。だから、みんなは生きろ。生きてくれ俺の分まで。

俺には最後にやらなきゃいけないことがある。」

そう言う、アカヤの貌はいつも以上に凜としていた。みんなは言葉も出ない。そんな中、セイカは言った。

「アカヤ、おまえは間違ってるよ。」

静かな口調でセイカは語る。

「死ぬことで何を解決することもできないぞ。おまえが死んだらここにいるみんなも含めて多くの人が悲しむだろう。それはおまえの本当の望みじゃないでしょう。」

言われて、アカヤはセイカを見つめ返した。

「それでも・・・俺は行かなきゃいけない。おれは今回のことに命をかけると宣言したんだよ。コクハ、分かって欲しい。」

「分からないね。」

セイカは引き下がらない。

「分かりたくもない。命はな。かけるものじゃないと思うよ。背負って歩くものだと思うんだよ。」

「・・・それでも・・・」

「わたしは、約束したんだよ。」

「・・・」

「おまえらを一人も失うことなくこれを終わらす・・・。そのために来たんだ・・・。死ぬなんて言うなよ。」

いつの間にかセイカの口調はセイカ自信のものになっていた。その表情ももはやコクハの貌では無かった。アカヤは微笑む。

「コクハ・・・、きみがこんなに情熱的な貌をする子だとは知らなかったよ。」

さようなら。」

セイカの言葉届かず、アカヤはみんなに背を向けた。高い屋上から足下の下界を見下ろす。

「アカヤっっ！」

誰かが叫んだ。フェンスに掴みかかる音が重なる。

「もう、近づくな。」

アカヤは振り返らず制した。

「おしゃべりはおしまいだ。静かにみとって欲しい。俺の最後を。」

昼に姉から電話が来たとき、こう話された。

「中村赤耶が言うには市原紅太は自分のやり方で変えるって言ったらしい。」

マコトと二人で夕飯を終わらすとコクハは文庫片手に茶の間の指定席でテレビをつけながら本を開きそこに視線を送りながらも、実際は姉からの情報について考えていた。

コウタは自分のやり方でやるという・・・。というのはつまりコウタはアカヤ達のストライキには参加しないけど、何もしないわけではないという風に聞こえるからだ。

それではいったい彼は何を・・・。そう考えていると少しピンと引っかかることがあった。

そういえば、一番疑問だったことはアカヤは本当はいったい何をきっかけに革命を決意したのかだ。最初アカヤがみんなを集めた時に言った。

「みんなは騙されている。」

という言葉は本当にあいつの言葉だったのだろうか・・・。全て

の人間の行動にはそれなりの理由が必要だし、その動機の裏には衝動を引き起こす一種の引き金とも言おうか影響が必要だと思う。

それならアカヤが影響を受けたものはなんだ？それはもちろん自分の生活と他の普通の子供達の生活を比べたりする社会的な影響とか、いったい可能性はあるけど、コクハはこの時、どうもそういった流れ的なものよりはっきりとした影響を与える存在を感じた。つまりそれだけ今回の事件がアカヤの自由意志ではないと言いたいのだ。

コクハははっきり言ってアカヤが自由意志を持った人間だとは思っていない。というのもあいつは学校に通い続け生活態度も勉強もぴったり至成学院の方針に基づいて暮らしてきたのだ。それが自分の望みでないことでも不満一つこぼさず。きっとアカヤの母親は自分の子供が今、こんなことをしているのを信じることなどできないだろう。それぐらいアカヤという少年は大人の言いなりだったのだから。

しかし、そんなアカヤが教師を殴った。クラスメート達を扇動して立て籠もりを決行した。

アカヤが突然そんなことをし出した原因はもつと恣意的だったり誰かの故意によるものでは無いかとコクハは思う。そしてそう考えにくると不思議とこの名前が脳裏をよぎり続けるのだ。

市原紅太……。

彼はどうして登校拒否をしたのだろう。やはりアカヤやD組のみんなと同じように今の押しつけられた暮らしに嫌気がさしたのだろう。だとしたら彼はすごい。

コクハは登校拒否によつては実は弱いものより強いものが多く存在すると思っている。

今の暮らしが嫌でも抜け出せないでいる人間は多い。だれもが自分の後ろには断崖絶壁があってそれ以上後退はできないと思ってしまふものだし、逃げるというのには勇気があるものだ。

そう考えると登校拒否という行動は一般的な見た目よりもずっと

自由意志な強い行動と言えないだろうか・・・。

コウタは実は誰よりも先に大人にいいなりの毎日という固い殻を突き破っていたのかもしれない。だから彼なら大人に逆らうことができる。アカヤはコウタに影響を受けたんじゃないだろうか？コウタが登校拒否になってからもアカヤとコウタの関係は続いているというのだから信憑性はある。

そこまで思ったとき、コクハはテレビから聞こえてきたその報道に耳を奪われた。

緊急速報。画面にはそうロゴされている。

リポーターと他のテレビ局の放送がけたたましい喧噪で夜の学校を外から映す。

至成学院。そう題された門から遠く夜の校庭の向こうにちょうど赤館の陰が佇む。しかしカメラが向けられたのはその赤館ではなくさらに左方向の本校者。その屋上に向かってサーチライトの長い光が夜を引き裂く。サーチライトの先で照らされている少年が屋上から下界を見下ろしていた。

赤いパーカーに黒の長ズボン。テレビカメラがズームアップするとその表情は穏やかで屋上の縁ぎりぎりに立って遠い下を見下ろす人間の貌とは思えないぐらいだった。

誰かが拡声器で少年に呼びかけている。少年からの応答はない。リポーター達のけたたましい喧噪は続く。映像は止まったまま動かない。そこで少年が何をしようとしているのか、コクハには分かっていた。

「アカヤ・・・」

テレビ画面の彼を見つめながらコクハは知らず呟いた。

「これ、例の？」

隣でマコトが訊いてきたがもちろん応えてやる気など無い。今は、映像に全神経を集中していた。

マコトも静かに空気を把握してテレビ画面を見つめた。

「親や教師並びにマスコミの方々、警察の方々に至りましてはこの度の騒動で多大な迷惑とお騒がせしたことを先に謝罪します。」

本校舎の屋上。そこからアカヤが大声で語りかける。それを音声マイクがかすかに拾った。アカヤが喋り始めると多くのマスコミで騒がしかったその場は静まりかえった。みんなが彼の言葉に耳を傾けた。

「この戦いは、僕の負けです。そしてこの度の騒動の全責任は僕にあります。他の仲間達はいわば僕の被害者です。最初にそのことを把握していただきたい。」

「彼はいったいあんなところに立って何をしようとしているんだ！」

校長の榎田がそう苛立った声を上げた。

場所は校庭。教師や一部の親たちは固まってその少年の様子を見上げた。

「なんという・・・厄介な子供だ。」

唇をかみながら小さな声でそう嘆いたのは理事長の小高だった。

中村赤耶の母親は仕事を早退してきた夫に肩を支えられながら絶望的な眼差しで自らの息子を見上げて嗚咽を漏らし続けた。

保護者や教師達の周りにはずらりと機動隊やら警察の人間が並んでいる。

みんな深刻な表情だった。特にちらほらと保護者の手に繋がれた少年や少女達、D組の確保された連中は固唾をのんでリーダーの姿を見上げていた。

彼らは警察に保護された後、事情聴取の前にその場にいた保護者達の元へいったん引き渡されていた。

アカヤは声を張り上げて語った。

「しかしです。僕はこの度の行動を今も誤ったことだとは思ってません。決して後悔はしていません。

先ほど謝罪をしておいて矛盾と思われるかもしれませんが、僕は今とても気持ちが安らかなのです。

あなた達大人に自分という存在がこれほど力一杯ぶつかっていったことを誇りにさえ思います。

自分が違うと思えることを違うんだと訴えられる。こんなに自由なことはないのです。僕の人生は今、生まれ変わっています。とても充実した二日間だと思うんです。

あなた達が思っているように、僕は弱い。子供は弱いのです。それでも二本の足でこうして立とうと試みた頃の自発性は無限の強さを生む。

大人はそれを裏切ってはいけないと思うのです。僕を、多くの子供を決めつけてはいけないと思うのです。頼みたいことはもつと子供から離れて見守って欲しいと言うことでした。今もこうして僕が言う言葉で少しでもあなた達に気付いて欲しいのです。

少しでも僕のような不幸な子供を作って欲しくない……。」

セイカは今、イリヤ、アサギ、コウジ、ジュン、コウヘイと共に少年の後ろに立っていた。

少年はあれから二度と振り返ることはなく、下界に語りかけている。

屋上の入り口には不穏な気配が漂っている。その扉の後ろに多くの大人達が機会を見計らって隠れているのは明らかだった。

でも、誰も彼を止めることはできない。

大きなフェンスの向こうで彼はまさにだれにも邪魔されることない自由の上に立っている

中村赤耶という一人の人間が自分自身という全てを解放している。

それは美しいことなのかもしれないとセイカは感じた。その後ろ姿があまりにも真っ直ぐでその言葉の一つ一つがあまりにも汚れが無く、くすぐったいぐらいだった。

アカヤは語る。

「たとえば、僕のしたこの行動が、単なる甘えと受け取られたとしても、それがたとえば、甘えだとしても、甘えに嘘はない。

僕がこうして求めることが間違いなら人間という存在の根底に流れる探求精神の否定になる。

だから、僕はあえて最後まで求め続けたい。

僕たちの望むものは、生きる知恵なのではなく、生きる意味なのということ。

僕たちが、望むことは、社会を飛ぶ翼ではなく、ただ空のような広大な未知なる世界を飛ぶことなのということ。

それでも今、こうしてここから見下ろす景色を見て僕は思います。やっぱり僕は僕を生んでくれた母に、父に、感謝しています。だって僕はこんなに今、飛んでいる。今こうして生きていることが、終わりを前にすると嬉しい……。」

「ほら、見てください。こんなにこんなに震えてる……。」
アカヤは語る。

あるものは校庭の中程からそれを見上げ。あるものはテレビ画面の中継をまじまじと見つめ。またあるものは彼の後ろにじっと佇み少年を見つめる。

アカヤの手が、肩が、背筋が小刻みに微動する。

「この震えは……そう、恐怖です。生きているという最大の証です。僕はこんなに情熱的な心境を味わえたのは生まれて初めてです。」

少年は今、きっと泣いている。

「見えるんです。この高さからだ、あなた達がとても遠くとても絶望的な情景が脳に叩き付けられるんです。

気持ち良い……。

今までこんなことも知らずに生きてきたなんて、僕は今すつごく、幸せです。」

そして次の瞬間。

セイカは見た、少年の背中がだんだん前のめりに小さくなっていくのを。隣でイリヤがコウジがコウヘイがジュンがアサギが

「アカヤっっ！」

「アカヤくんっっ！」

嗚咽混じりの叫びを上げるのを、セイカは聞いた。

中村赤耶の母は自らの胸を必死に押さえつけながら夫に肩を支えられ、息子の姿が静かに下降するさまを呆然自失の貌でまじまじと眺めた。

共に戦った仲間達はそれぞれの保護者の腕を振り払い、鳴いた。叫んだ。涙を流した。

刹那的な時間がスローモーションのようにゆっくりと、少年の決して大きくはない体を真っ逆さまに地面へといざなう。

彼は一人暗闇の廊下でふすまの向こうのテレビの中の友人の最期を看取った。

さようなら、アカヤ……。

グジャ……。

革命は終わった。

コクハはこの時、テレビ画面のズーム映像が映し出すアカヤの貌がとても健やかな笑顔を浮かべていたのをこれから先、時がたつてもよく覚えていよう。

マコトは少年が飛び降りると興ざめしたようにテレビ画面から離れた。台所に向かい山積みの食器を洗うつもりらしい。

コクハはその後ろ姿を一瞥した後、少し考えた。

テレビ画面ではまだ、騒がしい後始末が放送されていたが、もうそれはどうでもいいことだった。

コクハは今更のように思った。たしかに赤耶の言うことは正しい面もある。

早期幼児教育というものを知っているだろうか？小さい頃から歴史上の人物の名前や難しい漢字や四文字熟語を記憶させ、幼児期のすさまじい学習能力を利用した教育である。

しかし、その幼児教育を行われた子供のほとんどが少年期を迎える前に、精神的に異常を来したり、それまで自由気ままに遊んでいた他の子供と比べ学習的に伸び悩むことが多いという。

それは何故なのか？0からの衝動。というものがある。無いところから何かが生まれる。それは一種の発生というものといえるだろう。

人間にはいや、生物にはこの力が生まれ持つて存在する。それはひとえに自分の力で手に入れるという当たり前のこと。自発的な要求。望むことである。たとえば猿でさえ、木の上の果実をむしり取るために木を上るという発想を会得するように、人間の子供も暮らしの中で自然にその何かを発想し手に入れるというプロセスを踏む。その中では手に入れたものよりもそれに至るまでの発想力や自発性を養えたことにこそ意義があるのだ。

早期幼児教育などを施された子供達は、基本的にそのナチュラル

な人間性をあまり持てていない。すなわち、彼らには自発性と想像力が欠けているのだ。しかし、実はそう言っても彼らには自発性を持ちたい、想像力を手に入れたという望みが強くある。それは生物的本能である。いわば受動と能動のアンバランスに生まれるストレスだ。そのバランスが悪い彼らは、ものを教えられ記憶させられ続ける受動的な毎日それ自体に不満を持ってその不満を具体的に解析する想像力も思考性もない。結局多くの早期幼児教育を施された子供は少年期になんらかの精神的混乱状態に陥る例が多い。

今回の事件もそれに近い。要するに大人達は子供に教えることばかりで学び取らせる時間を与えなかった。そうして超進学教育を施された生徒達は日に日にその束縛感にストレスを募らせ、爆発した。彼らが求めるものはようするに、様々な知識でもなく、世の中をうまく生きる方法でもなく、ただそれらを自分の手で選び取り、自発的に学ぶことなのだ。それは大人に教えられることではない、子供が自分の力で奪い取ることなのだ。それはつまり、「望む」ことを求めているのだ。望むこと、それこそが本当に「知る」ことに繋がっているのだから。

コクハはそれは正しいと思う。だから赤耶とはそれなりに気があった。

しかし、今回のような事件は大事なことを忘れているとも思った。何よりも大事なことは、大人を分かちてあげることなのだ。

あいつらは不器用なのだ。あいつらは子供なのだ。子供が分かちてあげなければ誰が彼らを正当化してあげれるのだろうか。彼らはいつだって後ろめたい。いつだって自分を正当化していたい。それではなければこの世の中は回らない。

だからコクハはアカヤのやり方は非合理的だと思う。それは自分たち自身の生みの親を否定することに繋がるのだから。それは自分たち自身を殺すことと変わらないだろう・・・。

「アカヤ、おまえは正しい。だけどあんまり大人をいじめるな・・・。」

コクハは未だ続く中継の画面に映る、ビニールシートをかぶせられて運ばれる少年の姿を眺めて、ポツリと感想を述べた。

しかし、結局この事件は、政府や学校や大人達によって中村赤耶がクラスメートをたぶらかして扇動した、中村赤耶の独断の犯行のようにして終わりを迎えるだろう。

ずばり大人達の勝ちだ。

それでもアカヤが死んだことにより、彼は神格化され一部の少年達の心に残るだろう。それは大人達の唯一の失敗かもしれない。そしてそれはアカヤの意図したことなのかもしれない。

そんな折り、生駒警察署に一本の電話が入った。電話を取った警察官に一人の少年が静かな口調でこう告げた。

「殺しました・・・」

「え？」

警官は少年の抑揚のないその言葉に思わず聞き返した。いたずらではなさそうだとははつきりと分かった。

「お父さんとお母さんを殺しました。死体はまだ家の中にそのままの状態であります。少し腐っていて臭いますが、取りに来てください。」

いたずらかいたずらでないかを見極めるのは慣れていた。そう言う仕事をしている上で人の嘘と本当を見極めるのは彼の仕事なのだから。警官は声を落着かせてそっと聞き返した。

「君、それはどういう事？」

少年は一瞬。間を置いて、

「生駒町、二丁目八番地の三。」

それだけを告げて電話を切った。

コクハは緊急生中継の長いニュースが終わりを告げる前にテレビを切った。

そして立ち上がる。

行ってみようか……。そう思った。

すると遠くからサイレンの音が聞こえた。警察のパトカーのサイレンだった。

マコトも食器を洗う手を止めた。それはすごく近い音だった。サイレンはある程度迫るとそこで落ち着いた。かなり近い。耳に深く残る繰り返されるイルミネーションのような音だ。

マコトもコクハも顔を見合わせてから、玄関へ向かった。

そのサイレンの音が隣家のほうから聞こえてきているのは明らかだった。

コクハの心の中にはもう、何らかの形でその理由が分かっていた。玄関を開けて家の前の通りに出ると、隣の市原さんの家の前に二つのパトカーが止まっていた。サイレンを切って静かになった。しかし、サイレンは入れ違いに多くの野次馬を呼んだ。

人々が注目する中、しばらくすると市原さんの家から一人の人間が頭から服を被せられて警察に連れられて出てきた。貌はわからない。でもきつと、それは彼なのだと言うことはコクハには分かっていた。

隣でマコトは怪訝そうにその様子を見つめていた。彼は何も知らない。いや、誰もまだ何も知らない。

しかし、やがてその事実が新聞に掲載されるだろう。ニュースにも取り上げられるだろう。

それはとてもよくあるニュース。一人の少年が父親と母親を殺して、自首をした。ただそれだけのことだった。

これで本当に革命は終わった。何一つ、変えることはなく。

「ねえ、リカちゃん。アカヤ君はよくやったと思うわ。」

「……………」

「一生懸命戦ったもの。たくさんの認識を変えるのは難しいわ。」

「……………」

「少数派はいつも弾圧されるものよ。」

「……………」

「悲しいけど、それが宿命なのね。」

「……………」

「それでも彼はきつと、間違っていないわね。」

「……………」

「ねえ、そうでしょ？リカちゃん。」

END

Crimson blood／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6243i/>

B&B 第四章

2010年12月14日21時27分発行